

Sun Fire X4800 サーバー Linux オペ レーティングシステム設置マニュアル



Part No: 821-2241-10
2010 年 7 月、Revision A

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	5
製品情報 Web サイト	5
関連マニュアル	5
このドキュメントについて (PDF および HTML)	7
ドキュメントのコメント	7
変更履歴	8
Linux インストールの概要	9
Sun Installation Assistant (SIA)	11
SIA の作業の概要	11
SIA の入手	12
OS をインストールする前の準備作業	13
ブートハードディスクの消去方法	13
仮想ディスクの作成	14
メディアの取得方法の選択	31
シリアルまたはビデオポートを使用したコンソールアクセスによるローカルインストール	31
ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール	34
Oracle Enterprise Linux のインストール	41
配布メディアからの OEL のインストール	41
OEL のアップデート	44
Red Hat Enterprise Linux のインストール	47
配布メディアからの RHEL のインストール	47
RHEL のアップデート	50
SUSE Linux Enterprise Server のインストール	53
配布メディアからの SLES のインストール	53
SLES のアップデート	56
PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定	59
PXE の概要	60
PXE 用に DHCP サーバーをインストールおよび設定する方法	61

PXE サーバーへの portmap のインストール方法	62
PXE サーバーでの TFTP サービスの設定方法	62
PXE サーバーでの PXELINUX の設定方法	63
PXE サーバーでの NFS サービスの設定方法	63
ファイアウォールを無効にする	64
OEL 用 PXE インストールイメージの作成方法	65
RHEL 用 PXE インストールイメージの作成方法	68
SLES 用 PXE インストールイメージの作成方法	70
Oracle VM 用 PXE インストールイメージの作成方法	71
PXE サーバーからの Linux のインストール方法	73
Linux OS 設定用の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定	75
設置されているネットワークポートの特定方法	75
OEL または RHEL インストール時の論理および物理ネットワークインタフェース 名の特定方法	78
SLES インストール時の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定方 法	80
索引	83

はじめに

ここでは、関連するドキュメントと、フィードバックを送信するプロセスについて説明します。またドキュメントの変更履歴も示します。

- 5 ページの「製品情報 Web サイト」
- 5 ページの「関連マニュアル」
- 7 ページの「このドキュメントについて (PDF および HTML)」
- 7 ページの「ドキュメントのコメント」
- 8 ページの「変更履歴」

製品情報 Web サイト

Sun Fire X4800 サーバーの詳細については、Sun Fire X4800 サーバーの製品サイトを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/x4800>

このサイトには、次の情報やダウンロードへのリンクがあります。

- 製品情報および仕様
- サポートされているオペレーティングシステム
- ソフトウェアおよびファームウェアのダウンロード
- サポートされているオプションカード
- 外部ストレージオプション

関連マニュアル

次の一覧は、Oracle Sun Fire X4800 サーバーに関連するドキュメントの一覧です。これらのドキュメントとその他のサポートドキュメントは、次の Web サイトで入手できます。

<http://www.oracle.com/goto/x4800>

ドキュメントグループ	マニュアル名	説明
<p>Sun Fire X4800 サーバー固有のドキュメント</p>	<p>Sun Fire X4800 サーバー製品ドキュメント</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバーご使用の手引き』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバー設置マニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバーご使用にあたって』</p> <p>『Sun Installation Assistant 2.3 through 2.4 User's Guide for x64 Servers』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバー Oracle Solaris オペレーティングシステム設置マニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバー Linux オペレーティングシステム設置マニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバー Windows オペレーティングシステム設置マニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 Server Diagnostics Guide』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバーサービスマニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 Server Safety and Compliance Guide』</p> <p>『Oracle ILOM 3.0 補足マニュアル Sun Fire X4800 サーバー』</p> <p>『Sun x64 Server Utilities Reference Manual』</p> <p>保守ラベル</p>	<p>アスタリスク (*) が付いているすべてのドキュメントの統合 HTML 版。検索と索引が含まれる。</p> <p>図を多用した、設定のためのクイックリファレンス。</p> <p>最初の電源投入までの、サーバーの設置、ラック取り付け、および設定方法。</p> <p>サーバーに関する重要な最新情報。</p> <p>サポート対象の Windows または Linux OS の補助付きインストール、ファームウェアのアップグレード、およびその他の作業に使用する Sun のツール。</p> <p>Oracle Solaris OS をサーバーにインストールする方法。</p> <p>サポート対象の Linux OS をサーバーにインストールする方法。</p> <p>サポート対象のバージョンの Microsoft Windows をサーバーにインストールする方法。</p> <p>サーバーの問題を診断する方法。</p> <p>サーバーのサービスと保守の方法。</p> <p>サーバーの安全性および適合性に関する情報。</p> <p>サーバーの Integrated Lights Out Manager のバージョン固有の補足情報。</p> <p>サーバーにインストールされているユーティリティの使用方法。</p> <p>シャーシと CPU モジュールにある保守ラベルのコピー。</p>

ドキュメントグループ	マニュアル名	説明
Sun Integrated Controller Disk Management	『Sun x64 Server Disk Management Overview』	サーバーの記憶域の管理に関する情報。
x86 Servers Applications and Utilities Reference Documentation	『Sun x64 Server Utilities Reference Manual』	サーバーにインストールされているユーティリティの使用方法。
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Documentation (以前の Sun Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ドキュメント)	『Sun Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Features Updates and Release Notes』	ILOM の新機能に関する情報。
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Getting Started Guide』	ILOM 3.0 の概要。
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Concepts Guide』	ILOM 3.0 の概念に関する情報。
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface Procedures Guide』	ILOM を Web インタフェースを通じて使用する方法。
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI Procedures Guide』	コマンドによって ILOM を使用する方法。
	『Sun Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Management Protocols Reference Guide』	管理プロトコルに関する情報。

このドキュメントについて (PDF および HTML)

このドキュメントセットは、PDF および HTML の両形式で利用できます。トピックに基づく形式 (オンラインヘルプと同様) で情報が表示されるため、章、付録、およびセクション番号は含まれません。

ドキュメントのコメント

製品ドキュメントの品質向上のため、お客様のご意見、ご要望をお受けしております。コメントは下記よりお送りください。

<http://www.sun.com/secure/products-n-solutions/hardware/docs/feedback>

ご意見をお寄せいただく際には、下記のタイトルとパーツ番号を記載してください。

変更履歴

このドキュメントセットには次の変更が加えられています。

- 2010年4月 - 設置マニュアルのリリース
- 2010年6月 - 設置マニュアルおよびご使用の手引きの再リリース
- 2010年7月 - その他のドキュメントの初回リリース

Linux インストールの概要

本書では、使用しているサーバーに Oracle Enterprise Linux (OEL)、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) および SUSE Linux Enterprise Server (SLES) をインストールする手順について説明します。この章は、次の節で構成されています。

説明	リンク
Sun x64 サーバーでのさまざまな展開作業や回復作業の実行を支援するツール、Sun Installation Assistant (SIA) の使用方法について説明します。	11 ページの「 Sun Installation Assistant (SIA) 」
ハードディスクの既存のパーティションを消去して、オペレーティングシステムのインストール先となる仮想ディスクを作成する方法を説明します。	13 ページの「 OS をインストールする前の準備作業 」
使用しているサーバーに Oracle Enterprise Linux をインストールする方法について説明します。	41 ページの「 Oracle Enterprise Linux のインストール 」
使用しているサーバーに Red Hat Enterprise Linux をインストールする方法について説明します。	47 ページの「 Red Hat Enterprise Linux のインストール 」
使用しているサーバーに SUSE Linux をインストールする方法について説明します。	53 ページの「 SUSE Linux Enterprise Server のインストール 」
Linux システムで Preboot Execution Environment (PXE) サーバーを設定する方法、および使用しているサーバーに PXE サーバーを使用して Linux をインストールする方法について説明します。	59 ページの「 PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定 」
各ネットワークインタフェースの論理名 (OS によって割り当てられる) および物理名 (MAC アドレス) を見つける方法について説明します。	75 ページの「 Linux OS 設定用の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定 」

Sun Installation Assistant (SIA)

Sun Installation Assistant (SIA) は、Sun x64 サーバー上でさまざまな展開や回復の作業を行う際に役立つツールです。SIA は、ブート可能 CD、SIA ソフトウェアを用意した USB フラッシュドライブ、または PXE インストールサーバー上で使用可能なカスタマイズ SIA イメージから起動できます。

- 11 ページの「SIA の作業の概要」
- 12 ページの「SIA の入手」

SIA の作業の概要

SIA を使用すると、次の作業を実行できます。

注-実行できる作業は、サーバーによって異なる場合があります。

- サーバー上の OS に関係なく、システムの BIOS、ILOM サービスプロセッサのファームウェアを最新バージョンにアップグレードします。
- サーバー上の OS に関係なく、HBA のファームウェアを最新バージョンにアップグレードします。
- LSI ベースのディスクコントローラ (SAS-1 用 1068e、または SAS-2 用 2926x および 9280) がある場合、RAID-1 ボリュームを設定します。
- サポート対象の Windows または Linux オペレーティングシステムを Sun サーバーにインストールする支援を行います。SIA が適切なドライバとプラットフォーム固有のソフトウェアをインストールするため、ドライバディスクを別に作成する必要はありません。ライセンス付与された OS 配布メディアを CD またはネットワークイメージファイルから使用し、SIA ウィザードの指示に従ってインストールを実行できます。
- Sun 提供の最新のファームウェアとドライバにより SIA セッションを更新します。

SIAの入手

SIAは、最新のx86およびx64 Sunサーバーのオプションとして入手できます。また、SIAのISO CDイメージをSunからダウンロードすることも可能です。サポートされているSunサーバープラットフォームの全リストについては、次のSIA情報ページを参照してください。

<http://www.sun.com/systemmanagement/sia.jsp>

SIAの使用方法を解説するドキュメントは、次のSunドキュメントWebサイトで入手できます。

『Oracle Hardware Installation Assistant 2.3 through 2.5 User's Guide for x86 Servers』

OSをインストールする前の準備作業

オペレーティングシステムをインストールするには、事前に特定の作業を行う必要があります。この作業は、OSがブートドライブにすでにインストールされているかどうか、またはこれまでにパーティションが設定されていない新しいドライブであるかどうかによって異なります。

実行する必要があるタスクは次のとおりです。

- [13 ページの「ブートハードディスクの消去方法」](#)
- [14 ページの「仮想ディスクの作成」](#)

▼ ブートハードディスクの消去方法

サーバーのハードドライブに Solaris OS がプリインストールされている場合があります。その場合は、Linux をインストールする前に Solaris OS を消去する必要があります。

始める前に この手順を開始する前に、Tools and Drivers CD を入手してください。



注意-この手順を実行すると、ハードドライブのすべてのデータが消去されます。必要なデータはこの手順を開始する前にバックアップしてください。

- 1 ハードドライブ上の必要なデータをバックアップします。
- 2 サーバーの CD/DVD ドライブに **Tools and Drivers CD** を挿入します。
サーバーに CD/DVD ドライブがない場合は、リモートコンソール (JavaRConsole) を使用します。 [34 ページの「ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール」](#) を参照してください。
- 3 ツールとドライバの CD からシステムをブートします。
ツールとドライバのメインメニューが表示されます。

- 4 メインメニューから「**Erase Primary Boot Hard Disk**(プライマリブートハードディスクを消去する)」を選択します。
このオプションを選択すると、プライマリハードドライブ上に現在あるすべてのパーティション(診断パーティションを除く)が消去されます。診断パーティションがある場合、これは消去されません。

- 次の手順
- [14 ページの「仮想ディスクの作成」](#)
 - [28 ページの「ブートドライブを設定する方法」](#)

仮想ディスクの作成

オペレーティングシステムをインストールする前に、サーバー上に仮想ディスクを作成して、イメージのダウンロードに必要な領域を確保する必要があります。このダウンロードによってディスクの内容が消去されます。

仮想ディスクは、オペレーティングシステムのダウンロード用の LSI ファームウェアから作成できます。LSI ファームウェアには、サーバーの起動時のみアクセスできます。Windows が起動される前に LSI バナーが表示されているときに、Ctrl キーを押しながら H キーを押すと、LSI インタフェースが表示されます。

注- 仮想ディスクは、Tools and Drivers DVD の追加ドライバを通じてインストールされる MegaRAID ソフトウェアから作成することもできますが、オペレーティングシステムのインストールには使用しないでください。

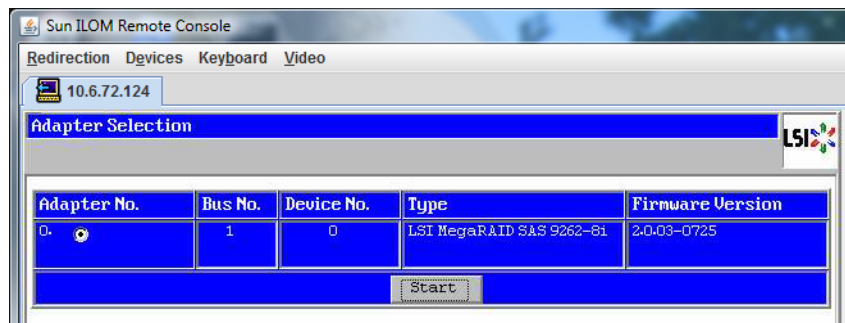
[14 ページの「仮想ディスクの作成方法」](#) を参照してください。

▼ 仮想ディスクの作成方法

- 1 サーバーには、サービスプロセッサ (SP) モジュールの IP アドレスを使用してログインします。
- 2 GUI ウィンドウで「**Remote Control**」タブをクリックして、**ILOM** リモートコントロールを起動します。
- 3 「**KVMS**」タブを選択します。
- 4 「**Mouse Mode**」で「**Relative**」を選択して、「**Save**」をクリックします。

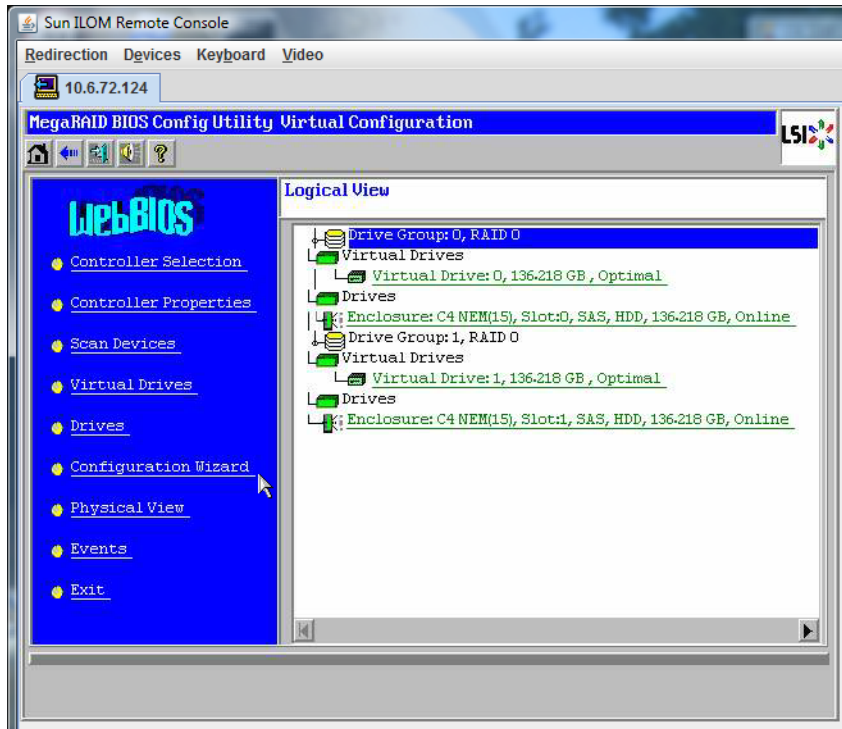
注- 「Relative」 オプションを選択すると、リモートコンソールでマウスをウィンドウからウィンドウに動かすことができるようになります。この手順の最後で、このマウス設定を「Absolute」に変更するよう求められます。

- 5 「Redirection (リダイレクション)」 タブをクリックします。「Redirection」画面で、「Launch Remote Console」をクリックします。
「ILOM 3.0 Remote Console」ウィンドウが表示されます。
- 6 「Devices」メニューで「Mouse」を選択してマウスを有効にします。
- 7 システムを再起動して、LSIバナーが表示されるまで待ちます。バナーページにデバイスが表示されたら、Ctrl キーを押しながら H キーを押します。
- 8 「Adapter Selection」画面で、「Start」をクリックします。

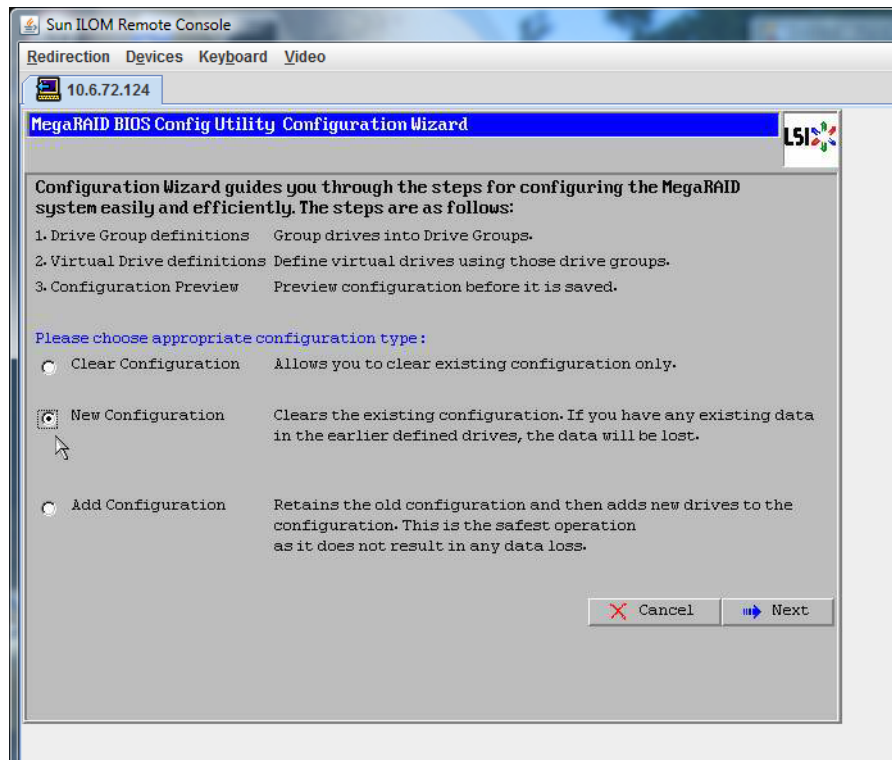


「MegaRaid BIOS Config Utility Virtual Configuration」画面が表示されます。

- 9 「MegaRAID BIOS Config Utility Virtual Configuration」画面で、「Configuration Wizard」を選択します。



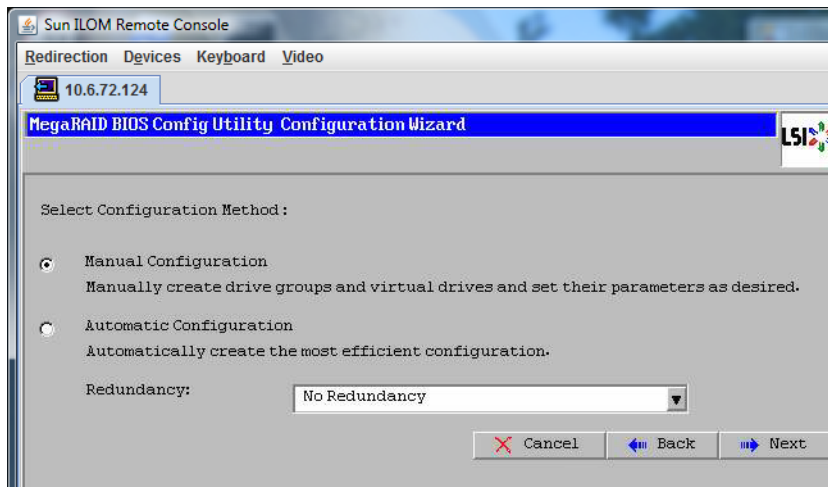
- 10 「Configuration Wizard」画面で「New Configuration」を選択して、「Next」をクリックします。



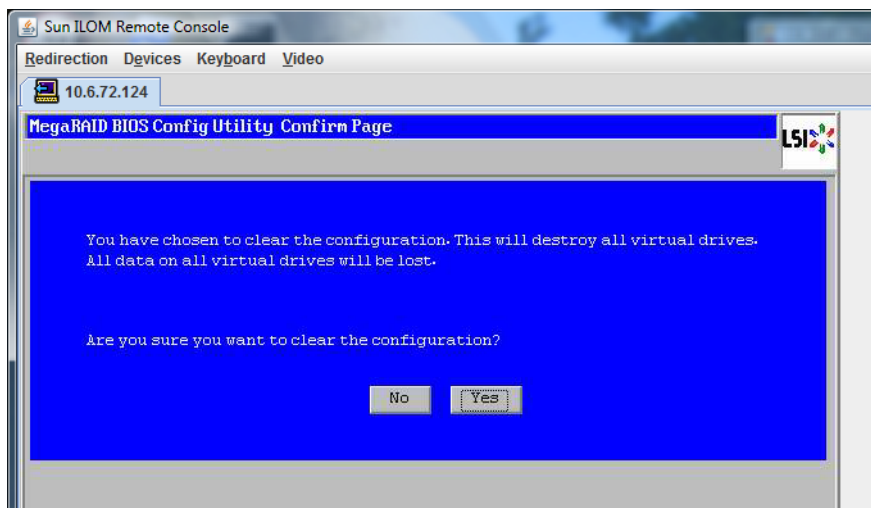
- 11 「Manual Configuration」を選択します。

「Automatic Configuration」を選択すると、システム上のすべてのハードドライブを含む単一の仮想ドライブが作成されます。複数のドライブがストライプセット (RAID0) として設定され、結合された記憶域の単一の仮想ドライブとして表示されます。これは、複数の障害ポイントが発生するため、望ましくない場合があります。

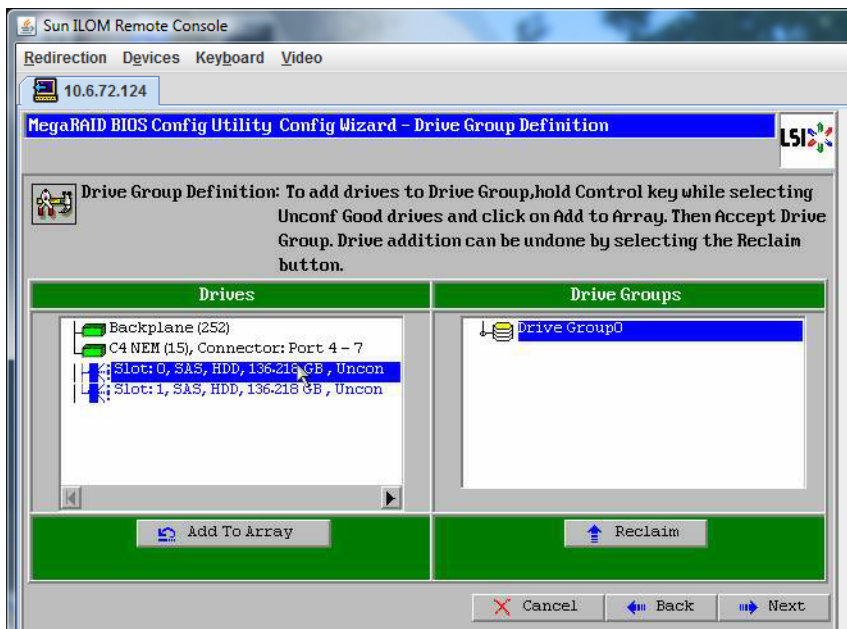
す。つまり、1つのドライブに障害が発生すると、システムが起動しなくなるということです。1つを除き、すべてのドライブを取り外す必要があります。または、「Manual Configuration」を選択して、1つのハードドライブだけを使用して仮想ドライブを作成することもできます。



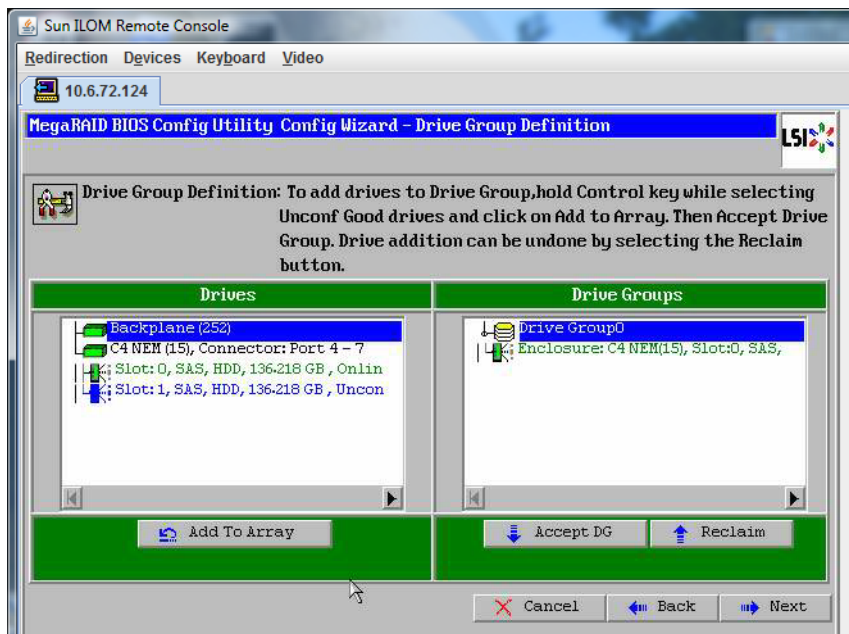
- 12 確認ウィンドウが表示されたら、「Yes」をクリックします。



- 13 「MegaRAID BIOS Config Utility Config Wizard – Drive Group Definition」画面に、システム内のドライブとドライブグループが表示されます。目的のドライブを選択して、「Add To Array」をクリックします。

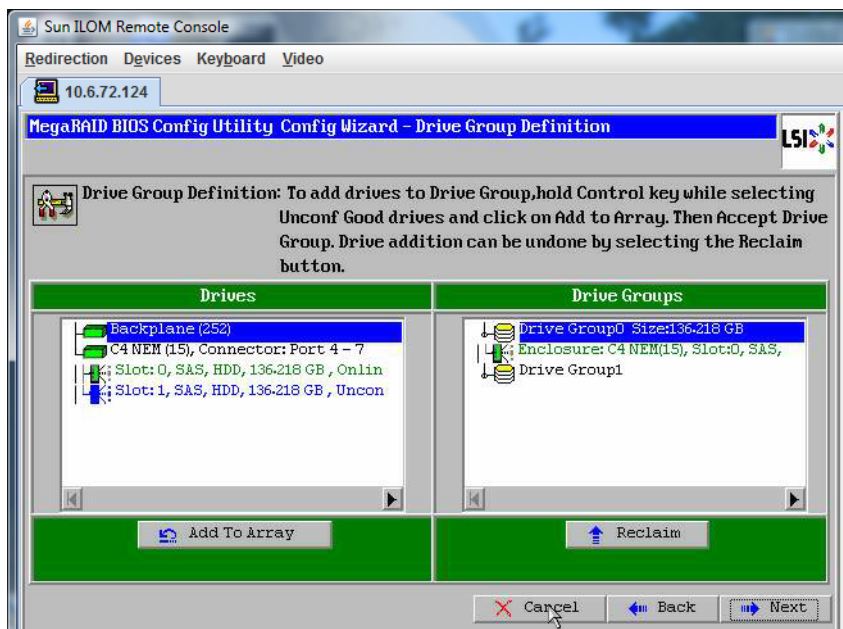


- 「Accept DG」をクリックしてドライブグループを作成します。
Drive Group0が表示されます。

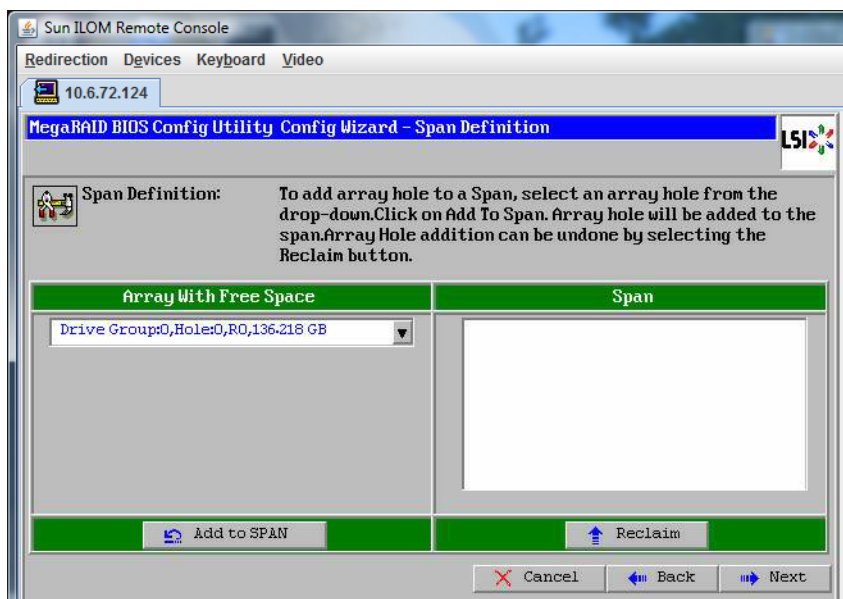


- 「Next」をクリックします。

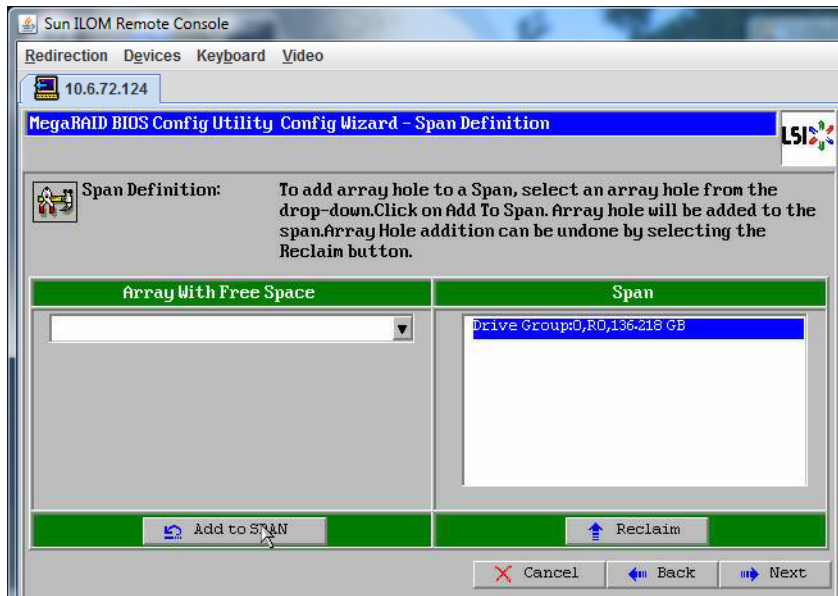
注- ドライブグループの選択は、「Reclaim」ボタンをクリックして取り消すことができます。



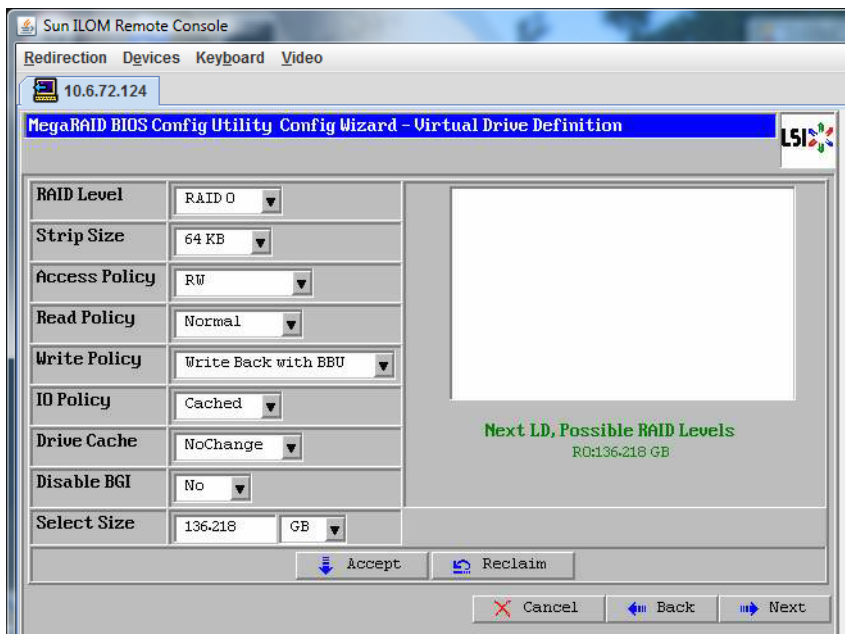
- 16 ドライブグループが「Span Definition」ウィンドウに表示されます。「Add to SPAN」をクリックします。



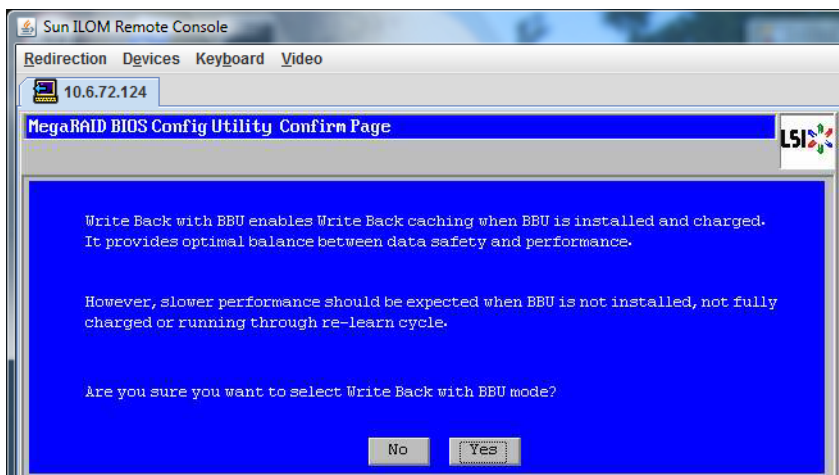
- 17 ドライブグループが「Span」に表示されます。「Next」をクリックします。



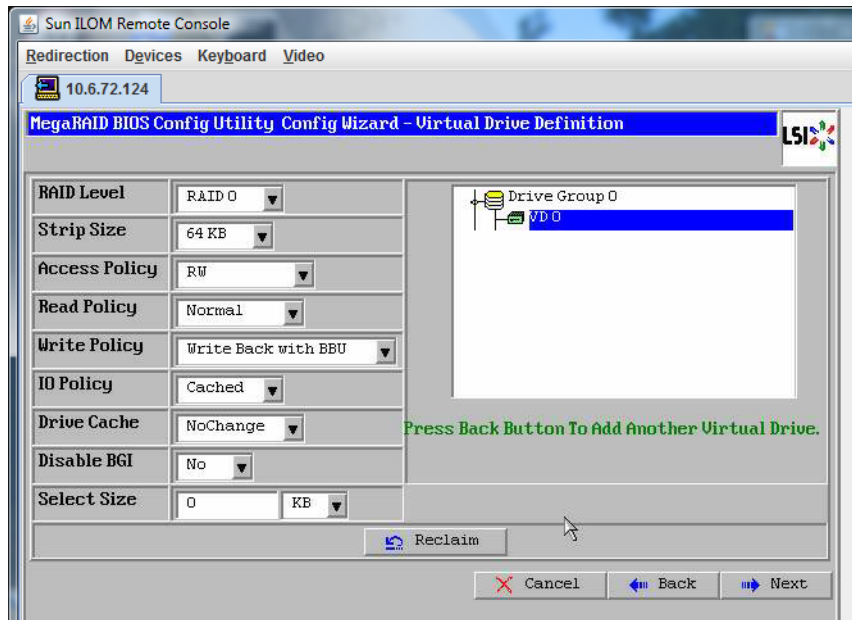
- 18 「Virtual Drive Definition」画面が表示されます。仮想ドライブのRAIDレベルと設定値を設定して、「Accept」をクリックします。
- RAIDの設定については、サーバーのディスク管理マニュアルを参照してください。



- 19 「Write Back with BBU mode」を確認するプロンプトが表示されたら、「Yes」をクリックします。

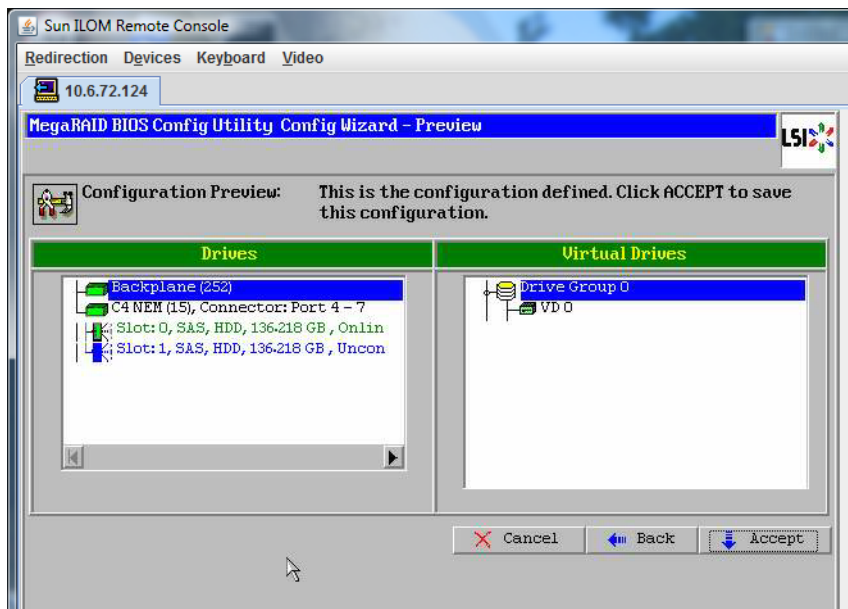


- 20 「Config Wizard」 ウィンドウで、「Next」をクリックします。

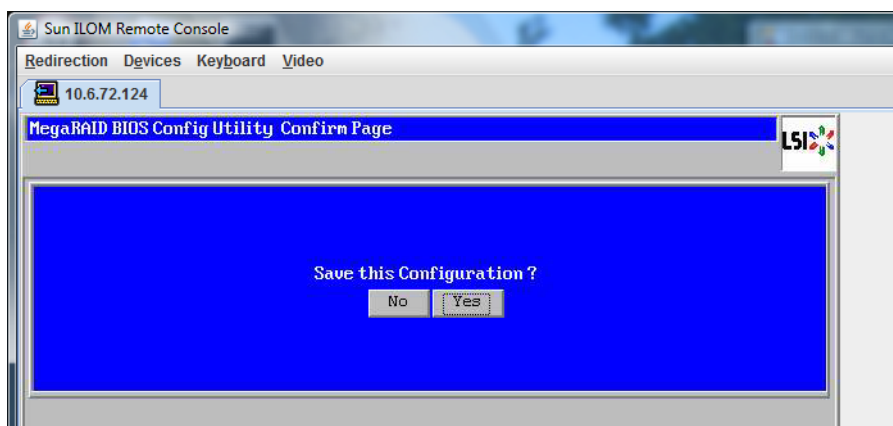


- 21 「Preview」画面が表示されます。仮想ドライブに**Drive Group 0**が含まれていることがわかります。

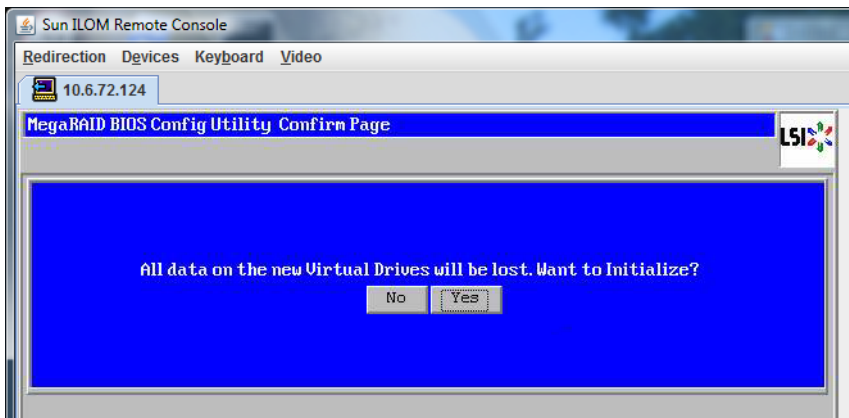
この図は、「Manual Configuration」オプションを使用した単一の仮想ドライブを示しています。



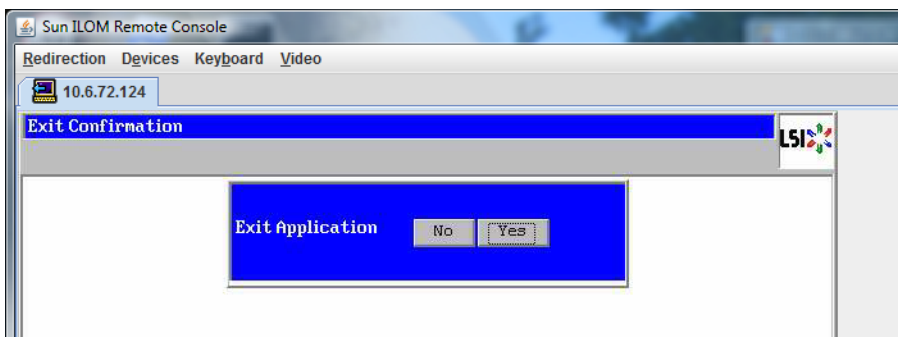
- 22 設定を保存します。



- 23 プロンプトに対して「Yes」をクリックします。仮想ドライブのすべてのデータが削除されます。初期化するかどうかを指定します。



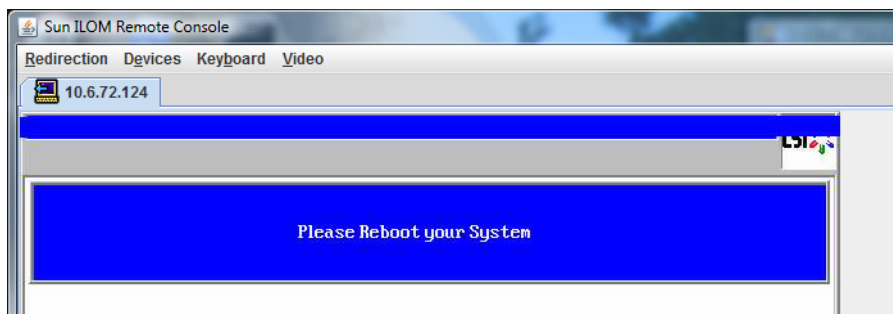
- 24 「Yes」をクリックして終了します。



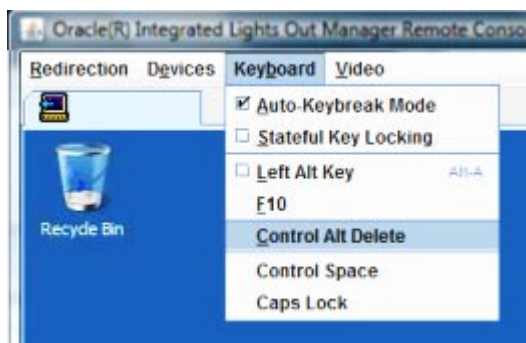
- 25 「Please Reboot Your System」と表示されたら、Alt キーを押しながら B キーを押して、キーボードプルダウンメニューを表示させます。



注意 - この手順を実行しない場合は、次の手順で「Control Alt Delete」を選択したときにローカルマシンが再起動されます。



- 26 矢印キーを使用してメニュー内の「Control Alt Delete」を選択し、リモートシステムを再起動します。Enterを押します。

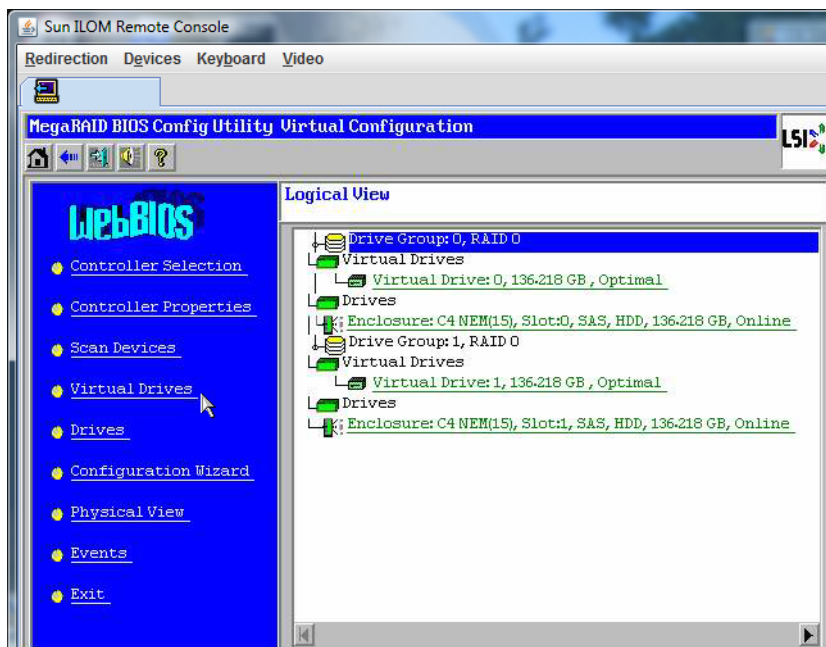


- 27 元の画面に戻り、マウスモードを「Absolute」に設定します。
- 「Remote Control」画面で「KVMS」タブを選択します。
 - 「Mouse Mode」で「Absolute」を選択します。
 - 「Save (保存)」をクリックします。

▼ ブートドライブを設定する方法

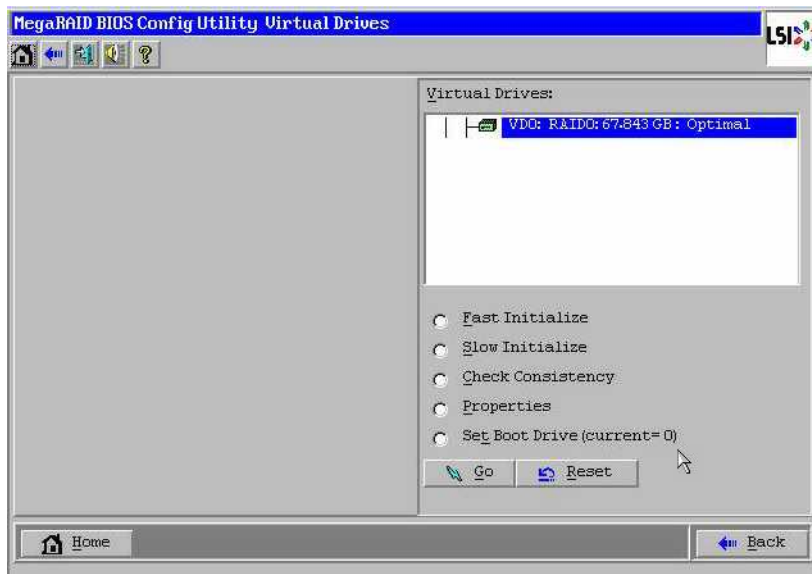
作成した仮想ドライブにオペレーティングシステムをインストールする場合は、ドライブをブートドライブとして設定する必要があります。

- 1 「Configuration Wizard」画面で「Virtual Drives」を選択します。



「MegaRAID BIOS Config Utility Virtual Drives Configuration」画面が表示されます。

- 2 オプションの1つとして「Set_Boot Drive (current=none)」が表示されているかどうかを確認します。
「Set_Boot Drive (current=none)」オプションが表示されている場合は、ブートドライブが設定されていません。



- 3 「Set_Boot Drive (current=none)」をオンにして、「Go」をクリックします。

メディアの取得方法の選択

この節では、Linux インストールメディアの取得方法を選択する必要があります。Linux のインストール手順は、選択したメディアの取得方法によって異なります。

メディアの取得方法	その他の要件
シリアルポートまたはビデオポートとローカル DVD を使用: サーバーに接続された物理 CD/DVD ドライブと、サーバーのシリアルポートまたはビデオポートに接続された端末を使用します。	サーバーの USB ドングルポートに直接接続された USB CD/DVD ドライブを使用し、シリアルポートまたはビデオポートを通じてサーバーコンソールにアクセスします。Linux をインストールするには、31 ページの「シリアルまたはビデオポートを使用したコンソールアクセスによるローカルインストール」を参照してください。
ILOM とリモート DVD または ISO イメージを使用: JavaRConsole を実行しているリモートシステム上で、リダイレクトされた物理 CD/DVD ドライブか ISO イメージファイルを使用します。	ブラウザを備えたりリモートシステム、接続された物理 CD/DVD ドライブ、Linux 配布 DVD、サーバーの管理ポートへのネットワークアクセス。この方法を使用する場合は、34 ページの「ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール」を参照してください。
PXE イメージを使用: PXE 環境から取得できるカスタマイズされたイメージを使用します。	サーバーのセットアップと PXE の実行、使用しているサーバー用にカスタマイズされたイメージについては、59 ページの「PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定」を参照してください。

シリアルまたはビデオポートを使用したコンソールアクセスによるローカルインストール

OS をインストールするには、システムコンソールの出力を表示する必要があります。出力は、シリアルポートまたはビデオポートのどちらでも表示されます。

注- このトピックでは、デフォルトのビデオポート出力およびシリアルポート出力について説明します。コンソールコマンドや GRUB メニュー選択などのほかの設定では、動作が異なる場合があります。

端末またはノートパソコンを使用している場合は、マルチポートケーブル (別名「ドングル」) を使用してサーバーのシリアルポートまたはビデオポートに接続し、コンソールにアクセスできます。『Sun Fire X4800 サーバー設置マニュアル』の「[管理 \(SP\) ケーブルの接続](#)」を参照してください。

- シリアルポート - マルチポートケーブルのシリアルコネクタと、端末またはノートパソコンをシリアルケーブルで接続します。SP を起動してから OS が立ち上がるまでの間に、すべての出力がシリアルポートに表示されます。[32 ページ](#)の「[シリアルポートの設定方法](#)」を参照してください。
- ビデオポート - KVM の VGA モニターケーブルをサーバーのマルチポートケーブルのビデオポートに接続します。SP の起動が完了すると POST/BIOS プロセスが開始し、すべての出力がビデオポートに表示されます。これは、OS が立ち上がるまで続きます。ほとんどの OS では、継続してビデオポートに情報が表示されます。ハードウェアのセットアップについては、『Sun Fire X4800 サーバー設置マニュアル』を参照してください。

▼ シリアルポートの設定方法

- 1 端末、または端末エミュレーションソフトウェアを実行しているノートパソコンを、サーバーのマルチポートケーブルを使用してシリアルポートに直接接続します。

次の端末設定を使用します。

8,n,1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1

9600 ボーレート

ソフトウェアのフローコントロール無効 (XON/XOFF)

- 2 サーバーの電源を入れます。
コンソール出力がシリアルポートに表示されます。
出力が表示されない場合は、BIOS で出力を設定する必要がある可能性があります。BIOS で出力を設定するには、次の手順に従います。
- 3 必要に応じて、BIOS の設定を確認します。
 - a. POST の実行中、起動プロセスの間に F2 (リモートキーボード上では F4) を押して BIOS に切り替えます。

- b. 右向き矢印キーを使用して「**Advanced**」タブに移動します。
左および右向き矢印キーを使用して「**BIOS Setup Utility (BIOS セットアップユーティリティ)**」メニュータブにアクセスできます。
 - c. 下向き矢印キーを使用して「**Remote Access Configuration**」オプションを強調表示し、**Enter** キーを押します。
「**Configure Remote Access type and parameters (リモートアクセスタイプとパラメータの構成)**」サブメニューの画面が表示されます。
 - d. 「**Remote Access**」が「**Enabled**」に設定されていることを確認します。
 - e. 「**Redirection after POST**」が「**Always**」に設定されていることを確認します。
 - f. 変更を保存して BIOS を終了するには、**F10** キーを押します。
- 4 OS に GRUB が含まれている場合は、同様に設定しなければならない場合があります。以下を実行します。

- a. GRUB メニューが表示されたら、「e」を押して編集します。
- b. `/boot/grub/menu.lst` を次のように変更します (次の例は Oracle Enterprise Linux 用です)。

変更前:

```
# grub.conf generated by anaconda
#
# Note that you do not have to rerun grub after making changes to this file
# NOTICE: You have a /boot partition. This means that
#          all kernel and initrd paths are relative to /boot/, eg.
#          root (hd0,0)
#          kernel /vmlinuz-version ro root=/dev/sda3
#          initrd /initrd-version.img
#boot=/dev/sda
default=1
timeout=5
title Oracle Enterprise Linux Server (2.6.18-164.el5xen)
    root (hd0,0)
    kernel /xen.gz-2.6.18-164.el5
    module /vmlinuz-2.6.18-164.el5xen ro root=LABEL=/
    module /initrd-2.6.18-164.el5xen.img
title Oracle Enterprise Linux Server-base (2.6.18-164.el5)
    root (hd0,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.18-164.el5 ro root=LABEL=/
    initrd /initrd-2.6.18-164.el5.img
```

変更後:

```
# grub.conf generated by anaconda
#
# Note that you do not have to rerun grub after making changes to this file
```

```
# NOTICE: You have a /boot partition. This means that
#          all kernel and initrd paths are relative to /boot/, eg.
#          root (hd0,0)
#          kernel /vmlinuz-version ro root=/dev/sda3
#          initrd /initrd-version.img
#boot=/dev/sda
default=1
timeout=5
serial --unit=0 --speed=9600
terminal --timeout=5 serial console
title Oracle Enterprise Linux Server (2.6.18-164.el5xen)
    root (hd0,0)
    kernel /xen.gz-2.6.18-164.el5 com1=9600 console=com1
    module /vmlinuz-2.6.18-164.el5xen ro root=LABEL=/ console=ttyS0,9600
    module /initrd-2.6.18-164.el5xen.img
title Oracle Enterprise Linux Server-base (2.6.18-164.el5)
    root (hd0,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.18-164.el5 ro root=LABEL=/ earlylprintk=ttyS0,9600
    console=ttyS0,9600
    initrd /initrd-2.6.18-164.el5.img
```

- 次の手順
- [41 ページの「Oracle Enterprise Linux のインストール」](#)
— または —
 - [47 ページの「Red Hat Enterprise Linux のインストール」](#)
— または —
 - [53 ページの「SUSE Linux Enterprise Server のインストール」](#)

ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール

サーバーの ILOM (Integrated Lights Out Manager) を使用すると、リモートシステムにマウントされた CD/DVD または ISO イメージを使用して、オペレーティングシステムをインストールできます。リモートコンソール機能によって、オペレーティングシステムをインストールしているサーバーに接続されているかのように、リモートシステムのキーボード、マウス、ビデオ、およびストレージを使用できます。リモートコンソールセッションを一度設定すれば、リモートでマウントされた配布メディア (CD/DVD またはそれに相当する ISO ファイル) からサーバーを起動できます。

この節では、JavaRConsole でリモートのコンソールシステムをセットアップしてネットワーク経由で Linux メディアを取得し、Sun サーバーにオペレーティングシステムをインストールする方法について説明します。次のいずれかの方法を選択します。

- [35 ページの「サーバーの ILOM Web インタフェースを使用したサーバーコンソールへのアクセス方法」](#)

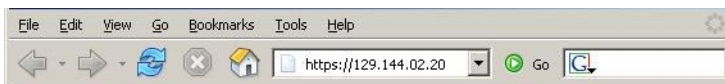
- 40 ページの「サーバーの ILOM CLI インタフェースを使用したサーバーコンソールへのアクセス方法」

▼ サーバーの ILOM Web インタフェースを使用したサーバーコンソールへのアクセス方法

始める前に 次の要件が満たされている必要があります。

- JavaRConsole システムでは、Solaris、Linux、または Windows が実行されている必要があります。
- Sun サーバーの Ethernet 管理ポートにアクセスできるネットワークに JavaRConsole システムが接続されている必要があります。
- Java Runtime Environment (JRE) 1.5 以降がインストールされている必要があります。CD-ROM のリダイレクトでは 32 ビット Java を使用する必要があります。
- JavaRConsole システムで Solaris を実行している場合は、JavaRConsole が CD/DVD-ROM ドライブにアクセスできるように、ボリューム管理を無効にする必要があります。
- JavaRConsole システムで Windows を実行している場合は、Internet Explorer の拡張セキュリティ機能を無効にする必要があります。
- サーバーの ILOM サービスプロセッサにネットワークアクセスできる必要があります (『Sun Fire X4800 サーバー設置マニュアル』の「管理 (SP) ケーブルの接続」を参照)。また、使用しているサーバーに対応した ILOM (Integrated Lights Out Manager) のドキュメントの指示に従い、ILOM の設定を済ませている必要もあります。

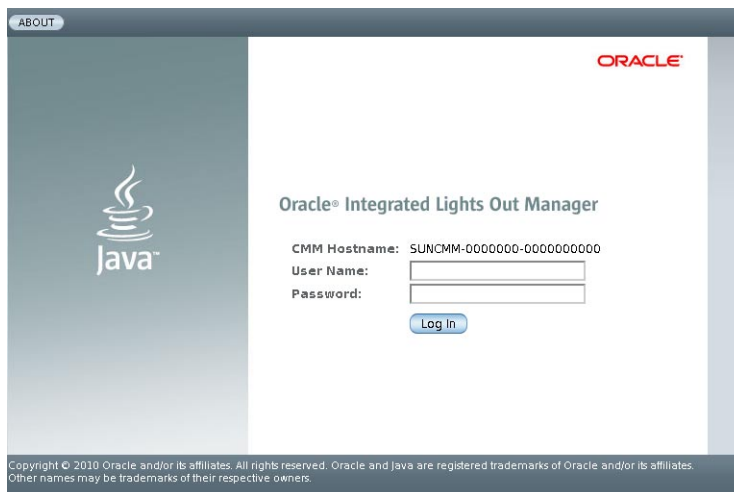
- 1 **Integrated Lights Out Manager (ILOM) サービスプロセッサの IP アドレスを JavaRConsole システムのブラウザに入力して、リモートコンソールアプリケーションを起動します。**



「Security Alert」ダイアログボックスが表示されます。

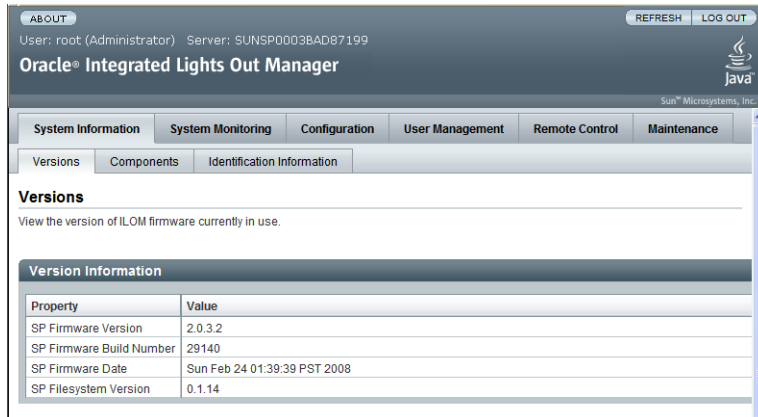


- 2 「はい」をクリックします。
ILOM のログイン画面が表示されます。



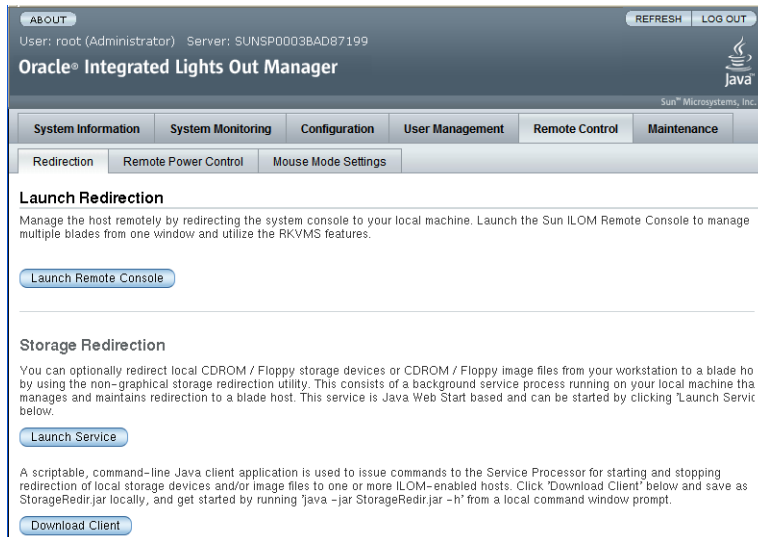
- 3 ユーザー名とパスワードを入力し、「Log In (ログイン)」をクリックします。
デフォルトのユーザー名は **root**、デフォルトのパスワードは **changeme** です。

ILOM の「Version Information (バージョン情報)」画面が表示されます。



- 4 ILOM Web インタフェースで「Remote Control」タブをクリックします。
「Launch Redirection (リダイレクトの起動)」画面が表示されます。

注 - 「Mouse Mode Settings (マウスモード設定)」タブでマウスモードが Absolute (絶対) モードに設定されていることを確認します。

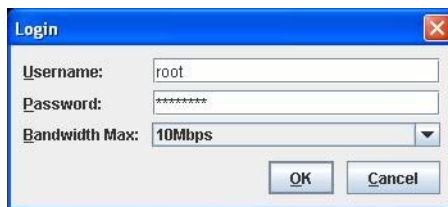


- 5 「Launch Remote Console」をクリックします。

注 - JavaRConsole システムのリダイレクトに Windows システムを使用している場合は、「Launch Redirection (リダイレクトの起動)」をクリックした後に、警告がもう 1 つ表示されます。「Hostname Mismatch (ホスト名の不一致)」ダイアログボックスが表示されたら、「Yes (はい)」ボタンをクリックします。



場合によっては「Remote Control」ダイアログボックスが表示されます。

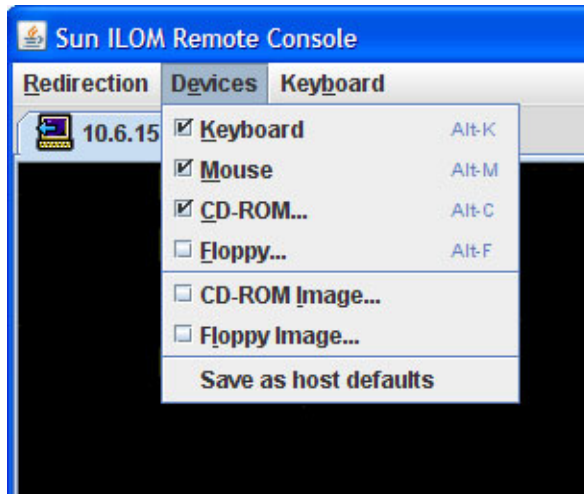


- 6 リモートコントロールの「Login」ダイアログボックスを使用して再度ログインするよう要求された場合は、ユーザー名とパスワードを入力し、「OK」をクリックします。

デフォルトのユーザー名は **root**、パスワードは **changeme** です。

正常にログインすると、JavaRConsole 画面が表示されます。

- 7 選択した取得方法に応じて、「Devices」メニューから CD のオプションを 1 つ選択します。



- **CD-ROM リモート:** JavaRConsole システムに接続された CD/DVD-ROM ドライブからオペレーティングシステムソフトウェア CD/DVD のコンテンツにサーバーをリダイレクトする場合は、「CD-ROM」を選択します。
- **CD-ROM イメージ:** JavaRConsole システム上に保存されたオペレーティングシステムソフトウェアの .iso イメージファイルにサーバーをリダイレクトする場合は、「CD-ROM Image (CD-ROM イメージ)」を選択します。



注意 - CD-ROM リモートまたは CD-ROM イメージのオプションを使用して Linux OS をインストールすると、CD-ROM のコンテンツにネットワーク経由でアクセスするため、インストールにかかる時間が大幅に長くなります。インストールにかかる時間は、ネットワークの接続状態とトラフィックによって異なります。

- 次の手順
- [41 ページの「Oracle Enterprise Linux のインストール」](#)
— または —
 - [47 ページの「Red Hat Enterprise Linux のインストール」](#)
— または —
 - [53 ページの「SUSE Linux Enterprise Server のインストール」](#)

▼ サーバーの **ILOM CLI** インタフェースを使用したサーバーコンソールへのアクセス方法

- 1 端末ウィンドウを開き、次のコマンドを入力して **CMM** への **SSH** 接続を確立します。

```
# ssh root@sp_ip
```

sp_ip は、サーバーのサービスプロセッサの IP アドレスです。

ログインプロンプトが表示されます。

- 2 次に示すように、**root** としてログインしてルートパスワードを入力します。

```
/hostname/login: root
```

```
password:xxxxxxx
```

正常にログインすると、次のプロンプトが表示されます。

->

- 3 コンソールにリダイレクトするには、次のコマンドを入力します。

```
-> start /SP/console
```

- 次の手順
- [41 ページの「Oracle Enterprise Linux のインストール」](#)
— または —
 - [47 ページの「Red Hat Enterprise Linux のインストール」](#)
— または —
 - [53 ページの「SUSE Linux Enterprise Server のインストール」](#)

Oracle Enterprise Linux のインストール

使用しているサーバーは、Oracle Enterprise Linux (OEL) 5.5 64 ビットと互換性があります。この節では、使用しているサーバーに OEL をインストールする方法に関する次のトピックについて説明します。

- [41 ページの「配布メディアからの OEL のインストール」](#)
- [44 ページの「OEL のアップデート」](#)

注-OEL は、PXE インストールを使用してインストールすることもできます。詳細は、[59 ページの「PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定」](#)を参照してください。

配布メディアからの OEL のインストール

使用しているサーバーに OEL をインストールする前に、次のアイテムを入手する必要があります。

- OEL メディアセット (CD または DVD) またはそれに相当する ISO イメージ。ISO イメージは、リモートインストールやインストール DVD の作成に使用できます。[42 ページの「OEL メディアのダウンロード方法」](#)を参照してください。
- DVD-ROM ドライブ。

注-リモートインストールを実行する場合は、DVD-ROM ドライブ、キーボード、マウス、およびモニターを、サーバーではなくローカルシステムに接続します。また、実際の DVD/CD-ROM の代わりに、ISO イメージを使用することもできます。

- USB で接続したキーボードとマウス。
- モニター。
- 次の Oracle ドキュメントの入手。

マニュアル名	説明	入手場所
リリースノート	使用している Oracle Enterprise Linux ソフトウェアバージョンのシステム要件およびシステム設定についての最新情報が含まれています。	次のサイトから参照できます (http://oss.oracle.com/el5/docs/)。
Oracle Enterprise Linux Installation Guide (Oracle Enterprise Linux インストールガイド)	Oracle Enterprise Linux のインストール手順を段階的に説明したオンライン文書です。	次のサイトからダウンロードできます (http://www.oracle-base.com/articles/linux/OracleEnterpriseLinux5Installation.php)。

関連項目:

- 42 ページの「OEL メディアのダウンロード方法」
- 42 ページの「配布メディアからの OEL のインストール方法」

▼ OEL メディアのダウンロード方法

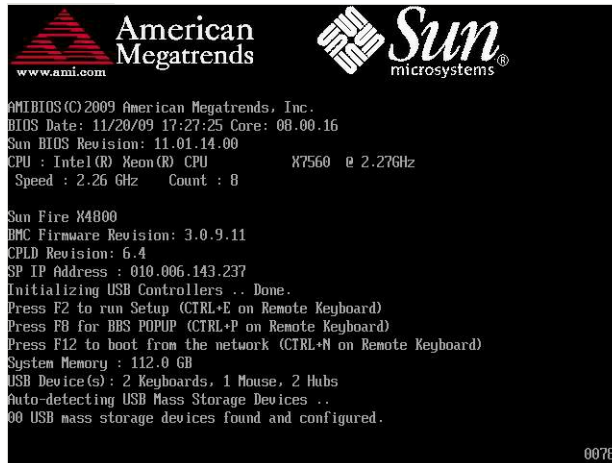
- 1 Oracle e-delivery サイト (<http://edelivery.oracle.com/linux>) に移動します。
- 2 アカウントを持っていない場合は、アカウントを作成します。
最新の ISO イメージをダウンロードするにはアカウントが必要です。
- 3 Oracle Enterprise Linux を見つけてダウンロードします。

次の手順 42 ページの「配布メディアからの OEL のインストール方法」に進みます。

▼ 配布メディアからの OEL のインストール方法

- 始める前に
- OS をインストールする前に、ターゲットディスクに仮想ディスクボリュームを作成する必要があります。14 ページの「仮想ディスクの作成」を参照してください。
 - ネットワークを使用したサーバーのオペレーティングシステムの設定時には、各ネットワークインタフェースの (OS によって割り当てられた) 論理名および物理名 (MAC アドレス) を指定する必要があります。詳細は、75 ページの「Linux OS 設定用の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定」を参照してください。
- 1 次のいずれかの方法を使用して、サーバーコンソールに接続します。
 - 31 ページの「シリアルまたはビデオポートを使用したコンソールアクセスによるローカルインストール」

- 34 ページの「ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール」
- 2 まだ行っていない場合は、手順1で選択した方法に応じて、Linux 配布 DVD を挿入するか、ISO イメージ配布メディアにアクセスします。
 - 3 サーバーの電源を入れるか、またはリセットします。
BIOS メッセージがコンソールに表示されます。



```

American Megatrends Sun
www.ami.com microsystems

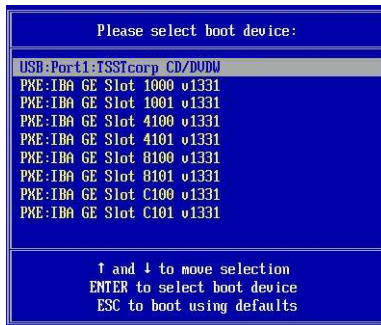
AMIBIOS (C)2009 American Megatrends, Inc.
BIOS Date: 11/20/09 17:27:25 Core: 08.00.16
Sun BIOS Revision: 11.01.14.00
CPU : Intel(R) Xeon(R) CPU X7560 @ 2.27GHz
Speed : 2.26 GHz Count : 8

Sun Fire X4600
BMC Firmware Revision: 3.0.9.11
CPLD Revision: 6.4
SP IP Address : 010.006.143.237
Initializing USB Controllers .. Done.
Press F2 to run Setup (CTRL+E on Remote Keyboard)
Press F8 for BBS POPUP (CTRL+P on Remote Keyboard)
Press F12 to boot from the network (CTRL+N on Remote Keyboard)
System Memory : 112.0 GB
USB Device(s) : 2 Keyboards, 1 Mouse, 2 Hubs
Auto-detecting USB Mass Storage Devices ..
00 USB mass storage devices found and configured.

0078

```

- 4 メッセージで選択肢が表示されたら、F8を押します。
しばらくすると、起動デバイスの選択メニューが表示されます(次の例を参照)。



```

Please select boot device:
USB:Port1:TSSTcorp CD/DVD
PXE:IBA GE Slot 1000 v1331
PXE:IBA GE Slot 1001 v1331
PXE:IBA GE Slot 4100 v1331
PXE:IBA GE Slot 4101 v1331
PXE:IBA GE Slot 8100 v1331
PXE:IBA GE Slot 8101 v1331
PXE:IBA GE Slot C100 v1331
PXE:IBA GE Slot C101 v1331

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults

```

- 5 一覧から起動デバイスを選択します。
物理 CD/DVD または ISO イメージから起動するには、CD/DVD を選択します。
制御がメディア上の OS インストールプログラムに移ります。

- 6 使用するインタフェースのタイプによって、ブートプロンプトで以下のいずれかを実行します。
 - テキストモードの場合、次のコマンドを入力します:**boot: Linux text**
 - グラフィカルモードの場合、ブートプロンプトで**Enter**を押します。
- 7 次のWebサイトにある**Oracle Enterprise Linux 5** インストールの文書を参照します。
<http://www.oracle-base.com/articles/linux/OracleEnterpriseLinux5Installation.php>

注-Linuxとは別のオペレーティングシステム(Solaris OSなど)がすでにインストールされている場合、インストールプロセス中にパーティションとして表示されます。OELをこのパーティションにインストールすると、該当のOSが上書きされます。パーティションを保持する場合は、OELを別のパーティションにインストールする必要があります。

次の手順 ■ [44 ページの「OELのアップデート」](#)に進みます。

OELのアップデート

OELを最新のOSにアップデートするには、次の手順を実行します。

注-システムが一般アクセスが可能なネットワーク上にある場合は、システムをアップデートするとセキュリティが向上します。

▼ OEL オペレーティングシステムのアップデート方法

始める前に 使用しているサーバーに、事前にOELをインストールしておく必要があります。

- **Oracle Enterprise Linux** オペレーティングシステムのアップデート方法を選択します。
 - **Oracle Unbreakable Linux Network (ULN)** インストールの場合、ローカルの**yum** リポジトリを作成して**yum** および**up2date**を設定し、これらを使ってアップデートパッケージをインストールします。
<http://www.oracle.com/technology/tech/linux/htdocs/yum-repository-setup.html> を参照してください。

- **Unbreakable Linux Network** サポートを使用しない OEL インストールの場合、**Oracle Public yum** サーバーと **yum** クライアントを使用してアップデートをインストールします。

<http://public-yum.oracle.com/> を参照してください。

注- この yum サーバーの使用には、いかなるサポートも提供されません。正誤表、セキュリティパッチ、およびその他のアップデートが必要な場合は、Oracle **Unbreakable Linux Network (ULN)** を使用してください。オンラインストアまたは販売担当者から入手できます。

Red Hat Enterprise Linux のインストール

使用しているサーバーは、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.5 64 ビットをサポートしています。関連トピックは次のとおりです。

- 47 ページの「配布メディアからの RHEL のインストール」
- 50 ページの「RHEL のアップデート」

注-RHEL は、PXE インストールを使用してインストールすることもできます。詳細は、59 ページの「PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定」を参照してください。

配布メディアからの RHEL のインストール

使用しているサーバーに RHEL をインストールする前に、次のアイテムを入手する必要があります。

- RHEL メディアセット (CD または DVD) またはそれに相当する ISO イメージ。ISO イメージは、リモートインストールやインストール DVD の作成に使用できます。48 ページの「RHEL メディアキットのダウンロード方法」を参照してください。
- DVD-ROM ドライブ。

注-リモートインストールを実行する場合は、DVD-ROM ドライブ、キーボード、マウス、およびモニターを、サーバーではなくローカルシステムに接続します。また、実際の DVD/CD-ROM の代わりに、ISO イメージを使用することもできます。

- USB で接続したキーボードとマウス。
- モニター。
- RHEL ドキュメントの入手 (<http://www.redhat.com/docs>)。

▼ RHEL メディアキットのダウンロード方法

- 1 企業アカウント情報を取得します。
最新の ISO イメージをダウンロードするには企業アカウントが必要です。
- 2 RedHat Enterprise Linux Update メディアキットを <http://rhn.redhat.com> からダウンロードします。

- 参照
- 48 ページの「配布メディアからの RHEL のインストール方法」
 - 50 ページの「RHEL オペレーティングシステムのアップデート方法」
 - 51 ページの「RHEL ドライバのアップデート方法」

▼ 配布メディアからの RHEL のインストール方法

- 始める前に
- OS をインストールする前に、ターゲットディスクに仮想ディスクボリュームを作成する必要があります。14 ページの「仮想ディスクの作成」を参照してください。
 - ネットワークを使用したサーバーのオペレーティングシステムの設定時には、各ネットワークインタフェースの (OS によって割り当てられた) 論理名および物理名 (MAC アドレス) を指定する必要があります。詳細は、75 ページの「Linux OS 設定用の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定」を参照してください。
- 1 次のいずれかの方法を使用して、サーバーコンソールに接続します。
 - 31 ページの「シリアルまたはビデオポートを使用したコンソールアクセスによるローカルインストール」
 - 34 ページの「ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール」
 - 2 まだ行っていない場合は、手順 1 で選択した方法に応じて、Linux 配布 DVD を挿入するか、ISO イメージ配布メディアにアクセスします。

- 3 サーバーの電源を入れるか、またはリセットします。
BIOS メッセージがコンソールに表示されます。

```

American Megatrends
www.ami.com

Sun Microsystems

AMIBIOS (C) 2009 American Megatrends, Inc.
BIOS Date: 11/20/09 17:27:25 Core: 06.00.16
Sun BIOS Revision: 11.01.14.00
CPU : Intel(R) Xeon(R) CPU           X7560   @ 2.27GHz
Speed : 2.26 GHz   Count : 8

Sun Fire X4000
BMC Firmware Revision: 3.0.9.11
CPLD Revision: 6.4
SP IP Address : 010.006.143.237
Initializing USB Controllers .. Done.
Press F2 to run Setup (CTRL+E on Remote Keyboard)
Press F8 for BBS POPUP (CTRL+P on Remote Keyboard)
Press F12 to boot from the network (CTRL+N on Remote Keyboard)
System Memory : 112.0 GB
USB Device(s) : 2 Keyboards, 1 Mouse, 2 Hubs
Auto-detecting USB Mass Storage Devices ..
00 USB mass storage devices found and configured.

0078

```

- 4 メッセージで選択肢が表示されたら、**F8**を押します。
しばらくすると、起動デバイスの選択メニューが表示されます (次の例を参照)。

```

Please select boot device:

USB:Port1:TSScorp CD/DVD
PXE:IBA GE Slot 1000 v1331
PXE:IBA GE Slot 1001 v1331
PXE:IBA GE Slot 4100 v1331
PXE:IBA GE Slot 4101 v1331
PXE:IBA GE Slot 8100 v1331
PXE:IBA GE Slot 8101 v1331
PXE:IBA GE Slot C100 v1331
PXE:IBA GE Slot C101 v1331

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults

```

- 5 一覧から起動デバイスを選択します。
物理 CD/DVD または ISO イメージから起動するには、CD/DVD を選択します。
制御がメディア上の OS インストールプログラムに移ります。
- 6 使用するインタフェースのタイプによって、ブートプロンプトで以下のいずれかを実行します。
 - テキストモードの場合、次のコマンドを入力します:**boot: linux text**
 - グラフィカルモードの場合、ブートプロンプトで **Enter** を押します。

- 7 『Red Hat Enterprise Linux Installation Guide』を参照して、残りのインストールプロセスを実行します。

注 - Linux とは別のオペレーティングシステム (Solaris OS など) がすでにインストールされている場合、インストールプロセス中にパーティションとして表示されません。RHEL をこのパーティションにインストールすると、該当の OS が上書きされません。パーティションを保持する場合は、RHEL を別のパーティションにインストールする必要があります。

- 8 50 ページの「RHEL オペレーティングシステムのアップデート方法」に進みます。

- 参照
- 50 ページの「RHEL オペレーティングシステムのアップデート方法」
 - 51 ページの「RHEL ドライバのアップデート方法」

RHEL のアップデート

RHEL を最新の OS にアップデートするには、次の手順を実行します。

注 - システムが一般アクセスが可能なネットワーク上にある場合は、システムをアップデートするとセキュリティが向上します。

RHEL は、次の手順に従ってアップデートします。

- 50 ページの「RHEL オペレーティングシステムのアップデート方法」
- 51 ページの「RHEL ドライバのアップデート方法」

▼ RHEL オペレーティングシステムのアップデート方法

始める前に 使用しているサーバーに、事前に RHEL をインストールしておく必要があります。
使用しているサーバーがインターネットにアクセスできる必要があります。

- 1 yum アップデートプログラムを実行します。

```
# yum
```

- 2 質問に答えて選択内容を決定したあと、パッケージをダウンロードしてインストールします。

yum を使用して、システムを定期的にアップデートする必要があります。

詳細は、マニュアルページを参照してください。次のように入力します。

```
# man yum
```

- 参照 51 ページの「RHEL ドライバのアップデート方法」

▼ RHEL ドライバのアップデート方法

サーバーに付属している Tools and Drivers CD で、インストールされているコンポーネントの最新のドライバを確認します。

- 1 サーバーに付属している **Tools and Drivers CD** を挿入し、`/mnt` ディレクトリにマウントします。
- 2 次のコマンドを入力します。

```
# cd /mnt/Linux/drivers  
# rpm -ivh driver-filename
```

たとえば、Intel 82599 (Niantic) 10GbE ネットワーク PCIe ExpressModule を使用している場合、次のコマンドを入力します。

```
# cd /mnt/Linux/drivers  
# rpm -ivh ixgbe-2.0.44.14-1-rhel5.5.x86_64.rpm
```

注 - Tools and Drivers CD の `/linux/drivers` ディレクトリで、使用しているオペレーティングシステム用の正しいドライバファイル名を確認します。

これで新しいドライバのインストールは完了です。

- 3 サーバーを再起動して、変更を有効にします。

SUSE Linux Enterprise Server のインストール

使用しているサーバーは、SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 64 ビットをサポートしています。この節では、使用しているサーバーに SUSE をインストールする手順について説明します。

関連トピックは次のとおりです。

- 53 ページの「配布メディアからの SLES のインストール」
- 56 ページの「SLES のアップデート」

配布メディアからの **SLES** のインストール

使用しているサーバーに SLES をインストールする前に、次のアイテムを入手する必要があります。

- SLES メディアセット (CD または DVD) またはそれに相当する ISO イメージ。ISO イメージは、リモートインストールやインストール DVD の作成に使用できません。54 ページの「SLES メディアキットのダウンロード方法」を参照してください。
- DVD-ROM ドライブ。

注-リモートでインストールする場合、DVD-ROM ドライブ、キーボード、マウス、およびモニターは、サーバーではなくリモートシステムに接続します。また、実際の DVD/CD-ROM の代わりに、ISO イメージを使用することもできます。

- USB で接続したキーボードとマウス。
- モニター。
- SLES ドキュメントの入手 (<http://www.novell.com/documentation/sles11>)。

関連項目:

- 54 ページの「SLES メディアキットのダウンロード方法」
- 54 ページの「配布メディアからの SLES のインストール方法」

▼ SLES メディアキットのダウンロード方法

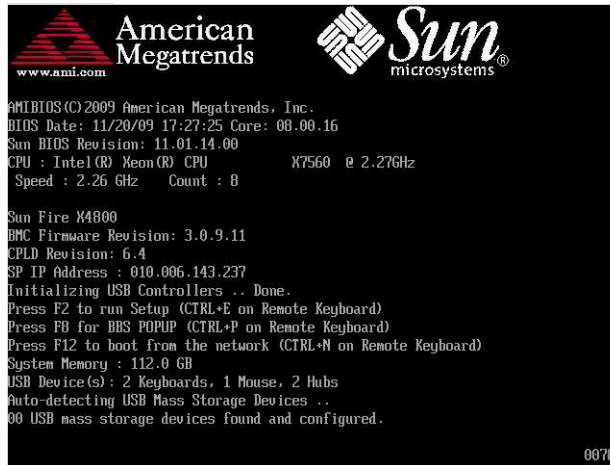
- 1 **Novell** アカウント情報を取得します。
ISO イメージをダウンロードするには Novell アカウントが必要です。
- 2 **SUSE Linux Enterprise Server** メディアキットを <http://download.novell.com> からダウンロードします。

- 参照
- [54 ページの「配布メディアからの SLES のインストール方法」](#)
 - [56 ページの「SLES オペレーティングシステムのアップデート方法」](#)
 - [57 ページの「SLES ドライバのアップデート方法」](#)

▼ 配布メディアからの SLES のインストール方法

- 始める前に
- OS をインストールする前に、ターゲットディスクに仮想ディスクボリュームを作成する必要があります。[14 ページの「仮想ディスクの作成」](#)を参照してください。
 - ネットワークを使用したサーバーのオペレーティングシステムの設定時には、各ネットワークインタフェースの (OS によって割り当てられた) 論理名および物理名 (MAC アドレス) を指定する必要があります。詳細は、[75 ページの「Linux OS 設定用の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定」](#)を参照してください。
- 1 次のいずれかの方法を使用して、サーバーコンソールに接続します。
 - [31 ページの「シリアルまたはビデオポートを使用したコンソールアクセスによるローカルインストール」](#)
 - [34 ページの「ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール」](#)
 - 2 まだ行っていない場合は、手順 1 で選択した方法に応じて、**Linux 配布 DVD** を挿入するか、**ISO イメージ配布メディア**にアクセスします。

- 3 サーバーの電源を入れるか、またはリセットします。
BIOS メッセージがコンソールに表示されます。



```
www.ami.com
American Megatrends
Sun
microsystems®

AMI BIOS (C) 2009 American Megatrends, Inc.
BIOS Date: 11/20/09 17:27:25 Core: 06.00.16
Sun BIOS Revision: 11.01.14.00
CPU : Intel(R) Xeon(R) CPU X7560 @ 2.27GHz
Speed : 2.26 GHz Count : 8

Sun Fire X4000
BMC Firmware Revision: 3.0.9.11
CPLD Revision: 6.4
SP IP Address : 010.006.143.237
Initializing USB Controllers .. Done.
Press F2 to run Setup (CTRL+E on Remote Keyboard)
Press F8 for BBS POPUP (CTRL+P on Remote Keyboard)
Press F12 to boot from the network (CTRL+N on Remote Keyboard)
System Memory : 112.0 GB
USB Device(s) : 2 Keyboards, 1 Mouse, 2 Hubs
Auto-detecting USB Mass Storage Devices ..
00 USB mass storage devices found and configured.

0078
```

- 4 メッセージで選択肢が表示されたら、**F8**を押します。
しばらくすると、起動デバイスの選択メニューが表示されます (次の例を参照)。



```
Please select boot device:
USB:Port1:TSSStcorp CD/DVDW
PXE:IBA GE Slot 1000 v1331
PXE:IBA GE Slot 1001 v1331
PXE:IBA GE Slot 4100 v1331
PXE:IBA GE Slot 4101 v1331
PXE:IBA GE Slot 8100 v1331
PXE:IBA GE Slot 8101 v1331
PXE:IBA GE Slot C100 v1331
PXE:IBA GE Slot C101 v1331

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```

- 5 一覧から起動デバイスを選択します。
物理 CD/DVD または ISO イメージから起動するには、CD/DVD を選択します。
制御がメディア上の OS インストールプログラムに移ります。
- 6 インストールガイドのインストール手順に従って、システムソフトウェアのインストールを完了します。

注-Linuxとは別のオペレーティングシステム(Solaris OSなど)がすでにインストールされている場合、インストールプロセス中にパーティションとして表示されま
す。SLESをこのパーティションにインストールすると、該当のOSが上書きされま
す。パーティションを保持する場合は、SLESを別のパーティションにインストール
する必要があります。

参照 56 ページの「SLESのアップデート」

SLESのアップデート

SLESを最新のOSにアップデートするには、次の手順を実行します。

注-システムが一般アクセスが可能なネットワーク上にある場合は、システムを
アップデートするとセキュリティが向上します。

SLESは、次の手順に従ってアップデートします。

- 56 ページの「SLESオペレーティングシステムのアップデート方法」
- 57 ページの「SLESドライバのアップデート方法」

▼ SLES オペレーティングシステムのアップデート方法

このタスクでは、YaSTを使用してSLESをアップデートします。

YaSTは、テキストモードとグラフィカルモードの両方で動作します。ここでの指示
は、両方に適用されます。

始める前に Novell Customer Center のユーザー名とパスワード、および SLES 製品のアク
ティベーションコードを取得します。

- 1 スーパーユーザーとしてログインします。
- 2 YaST オンラインアップデートサービスを開きます。
you
YaST ユーザーウィンドウが表示されます。
- 3 ネットワークファイアウォールに保護されていて、インターネットにアクセスする
ためにプロキシサーバーを使用する必要がある場合には、正しいプロキシ情報で
YaSTを設定します。
 - a. 「ネットワークサービス (Network Services)」 タブを選択します。

- b. 右側に表示されている「プロキシ (Proxy)」画面を選択します。
 - c. HTTP フィールドと HTTPS フィールドの両方に、正しいプロキシ URL を入力します。
 - d. YaST を終了します。
 - e. 以下のコマンドを入力します。

```
# rug set-prefs proxy-url proxy URL
```

ここでの *proxy URL* は、プロキシサーバーの完全修飾 URL です。たとえば、次のように入力します。

```
http:// proxy.yourdomain:3128/
```
 - f. YaST を再起動します。
- 4 Novell Customer Center に登録するには、次の手順に従います。
 - a. 「ソフトウェア (Software)」タブを選択します。
 - b. 「Novell Customer Center の設定 (Novell Customer Center Configuration)」を選択し、指示に従います。

これには、Novell Customer Center のユーザー名とパスワード、および SLES 製品のアクティベーションコードが必要です。
 - 5 「Online Update (オンラインアップデート)」タブを選択して、ソフトウェアのアップデートを実行します。

参照 [57 ページの「SLES ドライバのアップデート方法」](#)

▼ SLES ドライバのアップデート方法

サーバーに付属している Tools and Drivers CD で、インストールされているコンポーネントの最新のドライバを確認します。

- 1 サーバーに付属している **Tools and Drivers CD** を挿入し、`/mnt` ディレクトリにマウントします。
- 2 次のコマンドを入力します。

```
# cd /mnt/Linux/drivers  
# rpm -ivh driver-filename
```

たとえば、Intel 82599 (Niantic) 10GbE ネットワーク PCIe ExpressModule を使用している場合、次のコマンドを入力します。

```
# cd /mnt/Linux/drivers
# rpm -ivh ixgbe-2.0.44.14-1-sles11.x86_64.rpm
```

注 - Tools and Drivers CD の /linux/drivers ディレクトリで、使用しているオペレーティングシステム用の正しいドライバファイル名を確認します。

これで新しいドライバのインストールは完了です。

- 3 サーバーを再起動して、変更を有効にします。

PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定

この節では、Linux システムで PXE サーバーを設定する方法、および使用しているサーバーに PXE サーバーを使用して Linux をインストールする方法について説明します。

PXE サーバーを設定することにより、OEL 5.5 (64 ビット)、RHEL 5.5 (64 ビット)、SLES 11 (64 ビット) など、サポートされる OS のネットワークインストールを簡単に行うことができます。

PXE は、多数のサーバーが同じ設定になるようにセットアップできる強力な便利なソリューションです。これにより、1 台のサーバーを設定すれば、そのサーバーと同じバージョンの OS をネットワークシステムにいくつでもインストールできます。

PXE サーバーは、次の手順に従って設定します。

手順	説明	リンク
1	PXE セットアップの概要を把握します。	60 ページの「PXE の概要」
2	次のサーバーおよびサービスについて、存在の確認またはインストールを行います。	<ul style="list-style-type: none">■ DHCP - 61 ページの「PXE 用に DHCP サーバーをインストールおよび設定する方法」を参照してください。■ portmap - 62 ページの「PXE サーバーへの portmap のインストール方法」を参照してください。■ TFTP - 62 ページの「PXE サーバーでの TFTP サービスの設定方法」を参照してください。■ PXELINUX - 63 ページの「PXE サーバーでの PXELINUX の設定方法」を参照してください。■ NFS - 63 ページの「PXE サーバーでの NFS サービスの設定方法」を参照してください。
3	ファイアウォールを無効にします。	64 ページの「ファイアウォールを無効にする」

手順	説明	リンク
4	PXE インストールイメージを作成します。	65 ページの「OEL 用 PXE インストールイメージの作成方法」 68 ページの「RHEL 用 PXE インストールイメージの作成方法」 70 ページの「SLES 用 PXE インストールイメージの作成方法」 71 ページの「Oracle VM 用 PXE インストールイメージの作成方法」
5	PXE サーバーから Linux をインストールします。	73 ページの「PXE サーバーからの Linux のインストール方法」

PXE の概要

Linux の Preboot Execution Environment (PXE) を使用すると、ローカルストレージではなくネットワークインタフェースから、使用しているサーバーをブートできます。OS インストールの場合、ターゲットサーバーを PXE ベースの OS 配布イメージからブートします。これは、メディアがネットワーク上にあることを除けば、DVD からブートするのと変わりません。PXE を使用するには、必要なネットワークインフラストラクチャーをセットアップする必要があります。

- Linux を実行し、PXE ブート用に設定された DHCP サーバー。この節で紹介している例では、DHCP サーバーが PXE サーバーを兼ねています。
- PXE ブートをサポートする TFTP サーバー。PXE ブートイメージは TFTP サーバーに置かれます。この節で紹介している例では、DHCP サーバーが PXE サーバーとして機能し、そのサーバー上で TFTP がサービスとして実行されています。
- PXE サーバーにインストールされた PXELINUX。
- PXE サーバー上の PXE イメージ。この節で紹介している例では、イメージは Linux OS 配布インストールメディアになります。これを使用して PXE クライアントにリモートで OS のインストールを行います。
- ネットワークブートをサポートするネットワークインタフェースカードを搭載した PXE クライアント(「ターゲットシステム」とも呼ばれます)。クライアントは、PXE イメージを使用してネットワーク経由でブートされます。

注 - 使用する PXE ネットワークは IPv4 ネットワークを実行している必要があります。IPv6 は PXE ネットワークブートに対応していません。

使用しているサーバーのオンボードのネットワークインタフェースカード (NIC) は、ネットワークブートプロトコルである Preboot Execution Environment (PXE) に対

応しています。システム BIOS やネットワークインタフェース BIOS は、ネットワークに DHCP サーバーがあるかどうか自動的に問い合わせます。ネットワーク上の該当する DHCP サーバーがすでに設定され、同じネットワーク上で PXE プロトコルおよび PXE イメージサーバーを使用できるようになっている場合は、PXE を使用してサーバーをブートし、Linux のサポートされているバージョン (OEL または SLES) をインストールできます。

61 ページの「PXE 用に DHCP サーバーをインストールおよび設定する方法」に進みます。

▼ PXE 用に DHCP サーバーをインストールおよび設定する方法

PXE イメージ用に別のサーバーを設定することもできますが、次の例では Linux DHCP サーバーを PXE サーバーとして使用します。DHCP サーバーをセットアップするには、次の手順を実行します。



注意 - ネットワーク上にすでに DHCP サーバーがある場合は、新しい DHCP サーバーをセットアップしないでください。競合の原因になって、PXE ブートが失敗することがあります。

- 1 サーバーに電源を入れ、スーパーユーザーとしてログインします。
- 2 DHCP サーバーパッケージがすでにサーバーにインストールされているかどうか確認します。

```
# rpm -qa | grep dhcp-
```
- 3 DHCP サーバーが一覧表示されない場合は、Linux 配布メディアからインストールします。grep を使用して rpm を検索できます。

- 4 PXEClient 要求だけが PXEClient 応答を受信するように、DHCP 設定ファイル (/etc/dhcpd.conf など) を設定します。

次のエントリを DHCP 設定ファイルに追加します。詳細は、dhcpd.conf のマニュアルページを参照してください。

```
class "PXE" {
    match if substring(option vendor-class-identifier, 0, 9) = "PXEClient";
    option vendor-class-identifier "PXEClient";
    vendor-option-space PXE;
    next-server n.n.n.n;
    filename = "pxelinux.0";
}
```

ここでの *n.n.n.n* は、DHCP/PXE サーバーの IP アドレスです。

- 5 DHCP 設定ファイルで、**server-identifier** エントリを次のように編集します。

```
server-identifier n.n.n.n
```

ここでの *n.n.n.n* は、DHCP/PXE サーバーの IP アドレスです。

- 6 また、DHCP 設定ファイルで、次のサブネットエントリフィールドを検索します。

```
subnet 1.2.3.0 netmask 255.255.255.0 {  
  range dynamic-bootp 1.2.3.100 1.2.3.200;  
  option routers 1.2.3.1;  
  option broadcast-address 1.2.3.225;  
}
```

DHCP/PXE サーバーのネットワーク設定に従って、subnet、range、router、および broadcast-address エントリを編集します。

- 7 DHCP サービスを起動します。

- OEL または RHEL の場合、service dhcp start コマンドを入力します。

```
# service dhcpd start
```

- SLES の場合、YaST を使用してサービスを起動します。

- 8 常に DHCP を起動するようサーバーを設定します。

- OEL または RHEL の場合、次のように入力します。

```
# chkconfig dhcpd on
```

- SLES の場合、YaST を使用して、ブート時にサービスが起動するよう設定します。たとえば、次のように入力します。

```
# yast > system > Runlevel Editor
```

▼ PXE サーバーへの portmap のインストール方法

使用しているサーバーに portmap サーバーが含まれていない場合、インストールする必要があります。

- 1 portmap サーバーパッケージがすでに DHCP サーバーにインストールされているかどうか確認します。次のように入力します。

```
# rpm -qa | grep portmap
```

- 2 portmap が一覧表示されない場合は、Linux 配布メディアからインストールします。grep を使用して rpm を検索できます。

▼ PXE サーバーでの TFTP サービスの設定方法

- 1 TFTP サーバーパッケージがすでに PXE サーバーにインストールされているかどうか確認します。次のように入力します。

```
# rpm -qa | grep tftp-server
```

- 2 TFTP が一覧表示されない場合は、Linux 配布メディアからインストールします。grep を使用して、tftp-server rpm (OEL または RHEL の場合) および yast2-tftp-server rpm (SLES の場合) を検索できます。

- 3 `/etc/xinetd.d/tftp` ファイルを編集して、保存します。
次のように変更を加えます。
 - `-s /tftpboot` エントリを `-v -s /home/pxeboot` に変更します。
 - `disable` 属性を `no` に変更します。
- 4 `inetd` サーバーを再起動します。

```
# service xinetd restart
```

▼ PXE サーバーでの PXELINUX の設定方法

PXELINUX 環境を使用して、ターゲットシステムで OS インストーラを起動できます。PXELINUX は、SYSLINUX に含まれています。Linux の一部のバージョンには、PXELINUX の旧バージョンが含まれている場合があります。

SYSLINUX は次の Web サイトで入手できます。

<http://www.kernel.org/pub/linux/utils/boot/syslinux/>

- 1 PEX サーバーで、次のディレクトリを作成します。

```
# mkdir /home/pxeboot
```
- 2 SYSLINUX パッケージを取得し、PXE サーバーにアクセスできる任意のディレクトリにダウンロードおよび展開します。
- 3 展開した SYSLINUX パッケージから、`pxelinux.0` ファイルを PXE サーバーの適切なディレクトリにコピーします。

```
# cp /syslinux-directory/core/pxelinux.0 /home/pxeboot
```

ここでの `syslinux-directory` は、SYSLINUX を展開した場所です。
- 4 `pxelinux.cfg` ディレクトリを作成します。

```
# mkdir /home/pxeboot/pxelinux.cfg
```

このディレクトリに、default PXE 設定ファイルを作成します。この手順についてはプロセスの後半で説明します。

▼ PXE サーバーでの NFS サービスの設定方法

- 1 NFS サービスパッケージがすでにサーバーにインストールされているかどうか確認します。

```
# rpm -qa | grep nfs-utils
```

- 2 NFS サービスパッケージが一覧表示されない場合は、Linux 配布メディアからインストールします。grep を使用して、nfs-utils rpm (OEL または RHEL の場合) および nfs-kernel-server rpm (SLES の場合) を検索できます。

- 3 /etc/exports ファイルに次の行を追加して保存します。

```
/home/pxeboot *(no_root_squash,no_subtree_check,insecure)
```

- 4 NFS サービスを起動します。

```
# service nfs start
```

- 5 常に NFS サービスを起動するようサーバーを設定します。

```
# chkconfig nfs on
```

```
# chkconfig nfslock on
```

注 - DNS サーバーを使用している場合は、dhcpd.conf ファイルにある PXE のサブネットを表す dynamic-bootp エントリで定義されているアドレスの範囲に対して、DNS エントリが存在することを確認してください。DNS サーバーを使用しない場合は、/etc/hosts ファイルを編集して、dhcpd.conf ファイルにある PXE のサブネットを表す dynamic-bootp エントリに含まれるホストアドレスの範囲を追加します。

ファイアウォールを無効にする

このトピックでは、PXE クライアントがサーバーからソフトウェアをダウンロードできるように、ファイアウォールを無効にする方法について説明します。SUSE Linux 用と Oracle または Red Hat Enterprise Linux 用に、別個の手順が用意されています。

- [65 ページの「SUSE Linux でファイアウォールを無効にする方法」](#)
- [65 ページの「Oracle または Red Hat Enterprise Linux でファイアウォールを無効にする方法」](#)



注意 - ネットワークセキュリティの脆弱性 PXE サーバーでファイアウォール保護を無効にすると、そのサーバー上にあるデータのセキュリティは保証できなくなります。このサーバーがローカルのイントラネット外にネットワーク接続されている場合は、ソフトウェアを PXE クライアントにダウンロードしたあとで、ファイアウォールを再び有効にしてください。

▼ SUSE Linux でファイアウォールを無効にする方法

- YaST を使用して、サービスの実行レベルを編集します。たとえば、次のように入力します。

```
yast > system>Runlevel Editor
```

次の手順 [70 ページの「SLES 用 PXE インストールイメージの作成方法」](#)

▼ Oracle または Red Hat Enterprise Linux でファイアウォールを無効にする方法

- 1 **ipchains** サービスを停止します。
`# service ipchains stop`
- 2 **iptables** サービスを停止します。
`# service iptables stop`
- 3 サーバーの再起動時に **ipchains** サービスが起動しないようにします。
`# chkconfig ipchains off`
- 4 サーバーの再起動時に **iptables** サービスが起動しないようにします。
`# chkconfig iptables off`

注 - ipchains サービスがサーバーにインストールされていない場合は、エラーメッセージが表示されることがありますが、このメッセージは無視しても問題ありません。

- 5 **PXE** サーバーを再起動します。

次の手順

- [65 ページの「OEL 用 PXE インストールイメージの作成方法」](#)
- [68 ページの「RHEL 用 PXE インストールイメージの作成方法」](#)
- [70 ページの「SLES 用 PXE インストールイメージの作成方法」](#)
- [71 ページの「Oracle VM 用 PXE インストールイメージの作成方法」](#)

▼ OEL 用 PXE インストールイメージの作成方法

この手順では、サポートされる Oracle Enterprise Linux OS のインストールイメージを PXE サーバーで作成します。PXE サーバーを使用すると、ターゲットサーバーでネットワークブートを行い、オペレーティングシステムファイルをネットワーク経由でインストールできます。

始める前に PXE を使ってインストールするには、次のアイテムが必要です。

- PXE をサポートするよう、事前にネットワークインフラストラクチャーをセットアップしておく必要があります。59 ページの「PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定」を参照してください。
- PXE サーバーにアクセス可能な CD/DVD ドライブ。
- OEL 5.5 配布メディアセット。これは、CD のセットまたは 1 枚の DVD の場合があります。

- 1 Linux OS ソフトウェアを保持するディレクトリ構造をセットアップします。たとえば、次のように入力します。

```
# mkdir -p /home/pxeboot/oe15.5as_64/
```

注 - この手順では、OEL 5.5 とそのイメージソースディレクトリ /home/pxeboot/oe15.5as64 を例として使用します。別のソースディレクトリ構造を使用することもできます。

- 2 次のコマンドを入力して、各 Linux OS 配布 CD の内容を適切な PXE サブディレクトリにコピーします。たとえば、次のように入力します。

注 - CD の取り出しおよび挿入は、必ず CD/DVD ドライブのマウントが解除されている状態で行なってください。

```
# mount dev/cdrom /mnt/cdrom

# cp -r /mnt/cdrom/* /home/pxeboot/oe15.5as_64/

# umount /mnt/cdrom
```

DVD からインストールする場合は、この手順は一度だけで済みます。コピーが終了したら、次の手順に進みます。

- 3 **vmlinux** ファイルと **initrd.img** ファイルを適切な PXE サブディレクトリにコピーします。たとえば、次のように入力します。

```
# cp /home/pxeboot/oe15.5as_64/images/pxeboot/vmlinux /home/pxeboot/oe15.5as_64

# cp /home/pxeboot/oe15.5as_64/images/pxeboot/initrd.img
/home/pxeboot/oe15.5as_64
```

- 4 テキストエディタを使用して、**kickstart** ファイル (**ks.cfg**) を PXE サーバーの次の場所に作成します。

```
/home/pxeboot/oe15.5as_64/ks.cfg
```

5 必要な **kickstart** コマンドを追加します。

たとえば、OEL イメージを作成する場合は、次の内容をコピーして挿入します。

```
lang en_US
keyboard us
timezone --utc America/Los_Angeles
rootpw xxxx
reboot
bootloader --location=mbr
install
nfs --server n.n.n.n --dir /home/pxeboot/oel5.4as_64
clearpart --all
part /boot --fstype ext3 --size 512 --ondisk sda
part swap --size 65536 --ondisk sda
part / --fstype ext3 --size 1 --grow --ondisk sda
network --bootproto dhcp
auth --useshadow --enablemd5
firewall --disabled
#Do not configure the X Window System
skipx
text

%packages
@Everything

%pre

%post --nochroot
```

ここでの *n.n.n.n* は、PXE サーバーの IP アドレスです。--dir の後ろに指定されている保存場所が、イメージのトップレベルを指していることを確認します。

6 **kickstart** ファイルを保存します。

7 テキストエディタを使用して、**PXE** 設定ファイルを作成します。ファイル名は、**default** と付けます。

このファイルは、ネットワークブート時にターゲットホストに表示されるメニューを定義します。OEL 5.5 メニューラベル用のファイル内容の例を次に示します。

注 – append から ks.cfg までのテキストブロックは、改行なしの連続する文字列として入力してください。

```
default oel5.5as_64
label oel5.5as_64
kernel oel5.5as_64/vmlinuz
append ksdevice=eth0 console=tty0 load_ramdisk=1 initrd=oel5.5as_64/initrd.img
network ks=nfs:n.n.n.n :/home/pxeboot/oel5.5as_64/ks.cfg
```

ここでの *n.n.n.n* は、PXE サーバーの IP アドレスです。

注- コンソールを使ってインストールする場合は、`append` 行に `console=ttyS0,9600` を追加してください。

- 8 このファイルを `default` として PXE サーバーの `pxelinux.cfg` ディレクトリに保存します。たとえば、次のように入力します。

```
/home/pxeboot/pxelinux.cfg/default
```

▼ RHEL 用 PXE インストールイメージの作成方法

この手順では、サポートされる Red Hat Enterprise Linux OS のインストールイメージを PXE サーバーで作成します。PXE サーバーを使用すると、ターゲットサーバーでネットワークブートを行い、オペレーティングシステムファイルをネットワーク経由でインストールできます。

始める前に PXE を使ってインストールするには、次のアイテムが必要です。

- PXE をサポートするよう、事前にネットワークインフラストラクチャーをセットアップしておく必要があります。59 ページの「[PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定](#)」を参照してください。
- PXE サーバーにアクセス可能な CD/DVD ドライブ。
- RHEL 5.5 配布メディアセット。これは、CD のセットまたは 1 枚の DVD の場合があります。

- 1 Linux OS ソフトウェアを保持するディレクトリ構造をセットアップします。たとえば、次のように入力します。

```
# mkdir -p /home/pxeboot/rhel5.5as_64/
```

注- この手順では、RHEL 5.5 とそのイメージソースディレクトリ `/home/pxeboot/rhel5.5as64` を例として使用します。別のソースディレクトリ構造を使用することもできます。

- 2 次のコマンドを入力して、各 Linux OS 配布 CD の内容を適切な PXE サブディレクトリにコピーします。たとえば、次のように入力します。

注- CD の取り出しおよび挿入は、必ず CD/DVD ドライブのマウントが解除されている状態で行なってください。

```
# mount dev/cdrom /mnt/cdrom
```

```
# cp -r /mnt/cdrom/* /home/pxeboot/rhel5.5as_64/
```

```
# umount /mnt/cdrom
```

DVD からインストールする場合は、この手順は一度だけで済みます。コピーが終了したら、次の手順に進みます。

- 3 **vmlinuz** ファイルと **initrd.img** ファイルを適切な **PXE** サブディレクトリにコピーします。たとえば、次のように入力します。

```
# cp /home/pxeboot/rhel5.5as_64/images/pxeboot/vmlinuz
/home/pxeboot/rhel5.5as_64
```

```
# cp /home/pxeboot/rhel5.5as_64/images/pxeboot/initrd.img
/home/pxeboot/rhel5.5as_64
```

- 4 テキストエディタを使用して、**kickstart** ファイル(**ks.cfg**)を **PXE** サーバーの次の場所に作成します。

```
/home/pxeboot/rhel5.5as_64/ks.cfg
```

- 5 必要な **kickstart** コマンドを追加します。

たとえば、RHEL イメージを作成する場合、次の内容をコピーして挿入します。

```
lang en_US
keyboard us
timezone --utc America/Los_Angeles
rootpw xxxx
reboot
bootloader --location=mbr
install
nfs --server n.n.n.n --dir /home/pxeboot/rhel5.5as_64
clearpart --all
part /boot --fstype ext3 --size 512 --ondisk sda
part swap --size 65536 --ondisk sda
part / --fstype ext3 --size 1 --grow --ondisk sda
network --bootproto dhcp
auth --useshadow --enablemd5
firewall --disabled
#Do not configure the X Window System
skipx
text

%packages
@Everything

%pre

%post --nochroot
```

ここでの *n.n.n.n* は、**PXE** サーバーの IP アドレスです。--dir の後ろに指定されている保存場所が、イメージのトップレベルを指していることを確認します。

- 6 **kickstart** ファイルを保存します。
- 7 テキストエディタを使用して、**PXE** 設定ファイルを作成します。ファイル名は、**default** と付けます。
このファイルは、ネットワークブート時にターゲットホストに表示されるメニューを定義します。RHEL 5.5 メニューラベル用のファイル内容の例を次に示します。

注 - `append` から `ks.cfg` までのテキストブロックは、改行なしの連続する文字列として入力してください。

```
default rhel5.5as_64
label rhel5.5as_64
kernel rhel5.5as_64/vmlinuz
append ksdevice=eth0 console=tty0 load_ramdisk=1 initrd=oe15.5as_64/initrd.img
network ks=nfs:n.n.n.n :/home/pxeboot/rhel5.5as_64/ks.cfg
```

ここでの `n.n.n.n` は、PXE サーバーの IP アドレスです。

注 - コンソールを使ってインストールする場合は、`append` 行に `console=ttyS0,9600` を追加してください。

- 8 このファイルを **default** として PXE サーバーの **pxelinux.cfg** ディレクトリに保存します。たとえば、次のように入力します。
`/home/pxeboot/pxelinux.cfg/default`

▼ SLES 用 PXE インストールイメージの作成方法

次の手順では、PXE インストール用の SLES 11 ファイルが入ったディレクトリセットアップを作成する方法について説明します。

始める前に PXE を使ってインストールするには、次のアイテムが必要です。

- PXE をサポートするよう、事前にネットワークインフラストラクチャーをセットアップしておく必要があります。59 ページの「[PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定](#)」を参照してください。
- PXE サーバーにアクセス可能な CD/DVD ドライブ。
- SLES 11 配布メディアセット。これは、CD のセットまたは 1 枚の DVD の場合があります。

- 1 **SLES 11** を保持するディレクトリ構造をセットアップします。次のように入力します。

```
# mkdir -p /home/pxeboot/sles11
```

例で示されている `/home/pxeboot/sles11/` ディレクトリ以外のターゲットディレクトリを使用できます。この手順の例では、このディレクトリを使用します。

- 2 次のコマンドを入力して、各 SLES 配布 CD の内容を適切な PXE サブディレクトリにコピーします。

```
# mount /dev/cdrom /mnt/cdrom
# cp -r /mnt/cdrom/* /home/pxeboot/sles11/
# umount /mnt/cdrom
```

注 - SLES 11 の内容全体を、単一のディレクトリに配置する必要があります。

- 3 サーバーからメディアを取り出します。

▼ Oracle VM 用 PXE インストールイメージの作成方法

本書のリリース時点では、サポートされる Oracle VM の最低バージョンは Oracle VM 2.2.1 です。次の手順を使用して、Oracle VM Server の PXE インストールイメージを作成します。

始める前に PXE を使ってインストールするには、次のアイテムが必要です。

- PXE をサポートするよう、事前にネットワークインフラストラクチャーをセットアップしておく必要があります。59 ページの「PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定」を参照してください。
- PXE サーバーにアクセス可能な CD/DVD ドライブ。
- Oracle VM Server 配布メディアセット。これは、CD のセットまたは 1 枚の DVD の場合があります。

- 1 Oracle VM Server ソフトウェアを保持するディレクトリ構造をセットアップします。

```
# mkdir -p /home/pxeboot/ovm_svr_2.2/
```

- 2 次のコマンドを入力して、各 OVM 配布 CD の内容を適切な PXE サブディレクトリにコピーします。

注 - CD の取り出しおよび挿入は、必ず CD/DVD ドライブのマウントが解除されている状態で行なってください。

```
# mount dev/cdrom /mnt/cdrom

# cp -r /mnt/cdrom/* /home/pxeboot/ovm_svr_2.2/

# umount /mnt/cdrom
```

DVDからインストールする場合は、この手順は一度だけで済みます。コピーが終了したら、次の手順に進みます。

- 3 **vmlinux** ファイルと **initrd.img** ファイルを適切な **PXE** ターゲットサブディレクトリにコピーします。

```
# cp /home/pxeboot/ovm_svr_2.2/images/pxeboot/vmlinux /home/pxeboot/ovm_svr_2.2
```

```
# cp /home/pxeboot/ovm_svr_2.2/images/pxeboot/initrd.img  
/home/pxeboot/ovm_svr_2.2
```

- 4 テキストエディタを使用して、**kickstart** ファイル(**ks.cfg**)を **PXE** サーバーの次の場所に作成します。

```
/home/pxeboot/ovm_svr_2.2/ks.cfg
```

- 5 必要な **kickstart** コマンドを追加します。

必要なコマンドがわかっている場合は、それを入力します。または、次の内容をコピーして挿入することもできます。

```
lang en_US  
#langsupport en_US  
keyboard us  
#mouse genericusb  
timezone --utc America/Los_Angeles  
rootpw xxxx  
reboot  
bootloader --location=mbr  
install  
nfs --server n.n.n.n --dir /home/pxeboot/ovm_svr_2.2  
clearpart --all  
part /boot --fstype ext3 --size 512 --ondisk sda  
part swap --size 4096 --ondisk sda  
part / --fstype ext3 --size 1 --grow --ondisk sda  
network --bootproto dhcp  
# password : abc123  
ovsagent --iscrypted Y2fEjdGT1W6nsLqtJbGUVeUp9e4=  
#ovsmgmtif eth0  
auth --useshadow --enablemd5  
firewall --disabled  
#Do not configure the X Window System  
skipx  
text  
  
%packages  
@Everything  
  
%pre  
  
%post --nochroot  
  
%post
```

ここでの *n.n.n.n* は、**PXE** サーバーの IP アドレスです。--dir の後ろに指定されている保存場所が、イメージのトップレベルを指していることを確認します。

- 6 **kickstart** ファイルを保存します。
- 7 テキストエディタを使用して、**PXE** 設定ファイルを作成します。ファイル名は、**default** と付けます。このファイルは、ネットワークブート時にターゲットシステムに表示されるメニューを定義します。
次に Oracle VM メニュー用のラベルの例を 2 つ示します。

注 - `append` から `ks.cfg` までのテキストブロックは、改行なしの連続する文字列として入力してください。

```
label ovm_svr_2.2 sda eth select
kernel ovm_svr_2.2/images/pxeboot/vmlinuz
append initrd=ovm_svr_2.2/images/pxeboot/initrd.img load_ramdisk=1 network
ks=nfs:n.n.n.n:/home/pxeboot/ovm_svr_2.2/ks.cfg mem=32g
```

```
label ovm_svr_2.2 sda eth select serial console
kernel ovm_svr_2.2/images/pxeboot/vmlinuz
append initrd=ovm_svr_2.2/images/pxeboot/initrd.img load_ramdisk=1 network
ks=nfs:n.n.n.n:/home/pxeboot/ovm_svr_2.2/ks.cfg mem=32g
console=ttyS0,115200
```

ここでの `n.n.n.n` は、PXE サーバーの IP アドレスです。

- 8 このファイルを **default** として PXE サーバーの次の場所に保存します。
`/home/pxeboot/pxelinux.cfg/default`

▼ PXE サーバーからの Linux のインストール方法

- 始める前に
- PXE をサポートするよう、事前にネットワークインフラストラクチャーをセットアップしておく必要があります。59 ページの「[PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定](#)」を参照してください。
 - サポートされる Linux イメージを、事前に PXE サーバーで作成しておく必要があります。次の適切な節を参照してください。
 - 65 ページの「[OEL 用 PXE インストールイメージの作成方法](#)」
 - 68 ページの「[RHEL 用 PXE インストールイメージの作成方法](#)」
 - 70 ページの「[SLES 用 PXE インストールイメージの作成方法](#)」
 - 71 ページの「[Oracle VM 用 PXE インストールイメージの作成方法](#)」
 - 「PXE クライアント」と呼ばれるターゲットサーバーを PXE サーバーと同じネットワークに接続します。
- 1 **PXE** クライアントの電源を入れます。
PXE クライアントは、PXE サーバー上の PXE イメージから Linux をインストールする対象になります。

- 2 PXEクライアントでネットワークブートするプロンプトが表示されたら、**F12**キーを押します。
PXEクライアントは、DHCPサーバーからIPアドレスを取得し、利用可能なPXEイメージのメニューを表示します。なお、この例では、DHCPサーバーはPXEサーバーとしても設定されています。
- 3 一覧からイメージを選択します。
対応するLinuxインストールイメージが、PXEクライアントにネットワーク経由でダウンロードされます。
OSのインストールプロセスが開始されるので、ローカルCD/DVDドライブからOS配布メディアをブートしたときと同様にインストール作業を進めます。
- 4 PXEクライアントにLinuxオペレーティングシステムをインストールして設定します。
Linuxメディアキット付属のマニュアルを参照してください。
- 5 オペレーティングシステムをアップデートします。
 - Oracle Enterprise Linux の場合、[44 ページの「OELのアップデート」](#)を参照してください。
 - Red Hat Enterprise Linux の場合、[50 ページの「RHELのアップデート」](#)を参照してください。
 - SUSE Linux Enterprise Server の場合、オンラインソフトウェアアップデートを実行して、オペレーティングシステムファイルをアップデートします。

Linux OS 設定用の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定

ネットワークを使用したサーバーのオペレーティングシステムの設定時には、各ネットワークインタフェースの(OSによって割り当てられた)論理名および物理名(MACアドレス)を指定する必要があります。

このトピックでは、これらの状況で必要な論理情報を取得する方法について説明します。本書では次の項目について説明します。

- 75 ページの「設置されているネットワークポートの特定方法」
- 78 ページの「OEL または RHEL インストール時の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定方法」
- 80 ページの「SLES インストール時の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定方法」

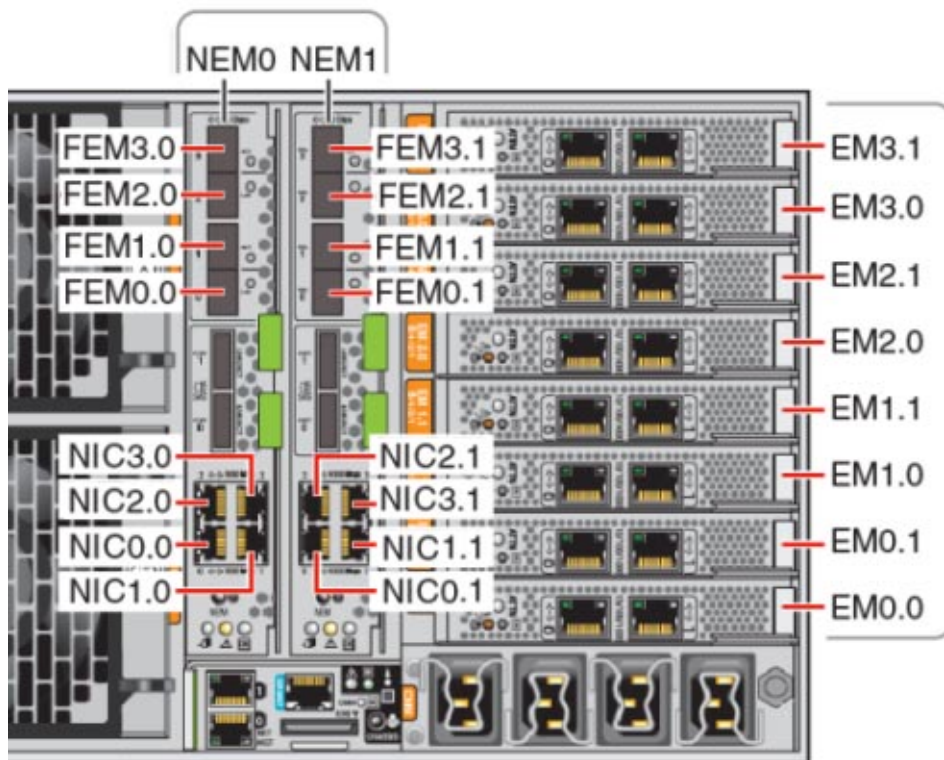
▼ 設置されているネットワークポートの特定方法

物理ネットワークポートの論理名を特定するには、次の手順を実行します。この情報は、オペレーティングシステムのインストール時および設定時に必要になります。

1 設置されているネットワークポートを特定します。

完全に設置された Sun Fire 4800 サーバーであれば、次のポートがあります。

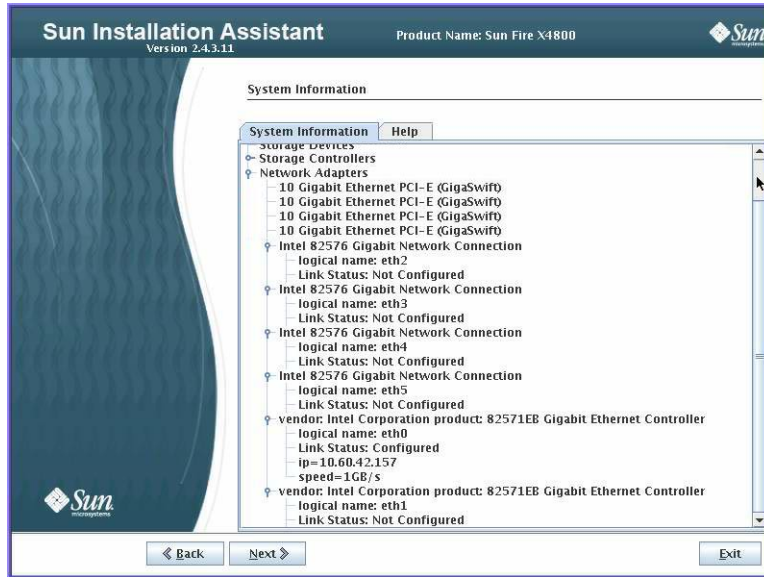
- **FEM:** Broadcom 10GbE ポートです。これらのポートを使用するには、各 NEM に対して、CPU モジュールそれぞれにファブリック拡張モジュール (FEM) が設置されている必要があります (CPU モジュールにつき合計 2 つ)。
- **PCIe EM:** PCIe ExpressModule (EM) スロットです。これらは、CPU モジュールにつき 2 つ割り当てられています。ネットワークインタフェースカードが設置されている場合、1 つ以上のポートを持つことができます。
- **NIC:** Intel 1GbE ポートです。これらは、CPU モジュールにつき 2 つ割り当てられています。



- 2 SIA を実行して「System Information (システム情報)」画面に進み、設置されているネットワークポートの論理名の割り当てを表示します。

オペレーティングシステムのインストールに SIA を使用しない場合でも、SIA により、設置されているコンポーネントを特定するための重要な情報が得られます。SIA の使用方法については、11 ページの「Sun Installation Assistant (SIA)」を参照してください。

- 設置されている FEM デバイスは、10 Gigabit Ethernet PCI-E (GigaSwift) とラベル付けされています。
- 設置されている NIC デバイスは、Intel 82576 Gigabit Network connection とラベル付けされています。
- 設置されている PCIe EM デバイスは、ラベルの接頭辞が vendor: になっています。例: vendor: Intel Corporation product: 82571EB Gigabit Ethernet Controller。



- 3 SIAの「System Information (システム情報)」画面に表示された、実際に設置されているポートとその論理名を次の表に示します。

システムのブート時、ポートはシステムのPCIe スキャン順に列挙され、論理名が割り当てられます。SIAには正しい論理名(eth0、eth1、eth2など)が一覧表示されますが、必ずしも論理名順にポートが表示されるわけではありません。

PCIe スキャン 順	ポート識別子	この場所のネット ワークポートはシステム に物理的に存在する か	このポートはアク ティブか(SIAに一覧表 示されているか)	SIAで割り当てられて いる論理名(eth0、eth1な ど)
1	EM0.1			
2	EM0.0			
3	FEM0.0			
4	FEM0.1			
5	NIC0.0			
6	NIC0.1			
7	NIC3.0			
8	NIC3.1			
9	EM3.1			
10	EM3.0			

PCIe スキャン 順	ポート識別子	この場所のネット ワークポートはシステ ムに物理的に存在す るか	このポートはアク ティブか (SIA に一覧表 示されているか)	SIA で割り当てられてい る論理名 (eth0、eth1 な ど)
11	FEM3.0			
12	FEM3.1			
13	NIC1.0			
14	NIC1.1			
15	EM1.1			
16	EM1.0			
17	FEM1.0			
18	FEM1.1			
19	NIC2.0			
20	NIC2.1			
21	EM2.1			
22	EM2.0			
23	FEM2.0			
24	FEM2.1			

ソフトウェアのインストール時に、この情報をもとにネットワークポートが正しく設定されるようにします。

▼ OEL または RHEL インストール時の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定方法

Oracle または Red Hat Enterprise Linux OS のインストール時および設定時に、ネットワークインタフェースの論理名および物理名 (MAC アドレス) を入力しなければならない箇所があります。

この節では、Linux 設定時にユーザーシェルを起動して、設定を続行するために必要な論理および物理ネットワークインタフェース名を取得する方法について説明します。

- 1 まだ行っていない場合には、ブートプロンプトで **linux rescue** と入力してから **Enter** を押します。

「Choose a Language (言語の選択)」画面が表示されます。

- 2 「**Choose a Language** (言語の選択)」画面で、適切な言語を選択して、「**OK**」をクリックします。
「**Keyboard Type** (キーボードタイプ (Keyboard Type))」画面が表示されます。
- 3 「**Keyboard Type** (キーボードタイプ)」画面で、適切な設定を選択してから、「**OK**」をクリックします。
「**Setup Network** (ネットワークの設定)」画面が表示されます。
- 4 「**Setup Network** (ネットワークの設定)」画面で、「**No** (いいえ)」をクリックします。
「**Rescue** (レスキュー)」画面が表示されます。
- 5 「**Rescue** (レスキュー)」画面で、「**Skip** (スキップ)」をクリックします。
ユーザーシェルが表示されます。
- 6 ユーザーシェルのコマンドプロンプト (**#**) で、すべてのネットワークインタフェースを表示するために、次のコマンドを入力して **Enter** を押します。

```
# ifconfig -a
```

Linux 名前付きネットワークインタフェースの出力が表示されます。以下の出力例を例としてご覧ください。

複数のネットワークインタフェースが存在して、インタフェースの出力が画面に入りきらない場合には、インタフェースごとに出力を表示することができます。

- 7 ネットワークインタフェースごとに出力を表示するには、コマンドプロンプトで以下を入力してから **Enter** を押します。

```
# ifconfig eth#
```

ここでの *eth#* はインタフェース番号です。例えば、以下のように入力します。

```
# ifconfig eth0
```

eth0 の出力が次のように表示されます。

上の出力例では、以下のようになっています。

```
Link encap:Ethernet HWaddr 00:14:4F:0C:A1:F2
inet addr:192.168.2.103 Bcast:192.168.2.255
```

- 最初の列の **eth0** エントリは、**OEL** 論理名前付きインタフェースです。出力の最初の列は、**OEL** または **RHEL** がネットワークインタフェースに割り当てた論理名を表します。
- 第2列 (1行目) の **HWaddr 00.14.4F.0C.A1:F2** エントリは、ネットワークポートの物理 **MAC** アドレスです。

- 8 あとから参照できるように、論理ネットワークインタフェース名と物理ポートの **MAC** アドレスを記録します。OEL または RHEL OS インストール時にネットワークインタフェースを設定する際に、この記録を参照する必要があります。
- 9 完了後、以下のいずれかを行って、ユーザーシェルを終了します。
 - ILOM で、「Remote Control (遠隔コントロール)」->「Remote Power Control (遠隔電力コントロール)」->「Reset (リセット)」を選択します。
 - ILOM 遠隔コンソールの「Keyboard (キーボード)」メニューで、「Ctrl Alt Delete」を選択します。
 - 他のコンソールで、**Ctrl->Alt->Delete** を押します。
- 10 OS インストールプログラムを再起動します。

▼ SLES インストール時の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定方法

SUSE Linux Enterprise Server OS のインストール時および設定時に、ネットワークインタフェースの論理名および物理名 (MAC アドレス) を入力しなければならない箇所があります。

このセクションでは、SUSE Linux OS 設定時にユーザーシェルを起動して、設定を続けるために必要な論理および物理ネットワークインタフェース名を取得する方法について説明します。

始める前に ラベルから、すべての物理ポートの MAC アドレスを見つけて記録します。

- 1 まだ行っていない場合は、「**Rescue System** (システムのレスキュー)」を選択して、**Enter** を押します。

「Loading Linux Kernel (Linux カーネルのロード中)」というメッセージの表示後に、SUSE スプラッシュ画面が表示されます。そのあと、「Choose a Keyboard Map (キーボードマップの選択)」画面が表示されます。
- 2 「キーボードマップの選択」画面で、適切なキーボード設定を選択して、「**OK**」をクリックします。

ユーザーシェルが起動して、「Rescue Login (レスキューログイン)」プロンプトが表示されます。
- 3 「**Rescue Login** (レスキューログイン)」プロンプトで、ログインするために **root** と入力して、**Enter** を押します。

レスキュープロンプトが表示されます。

- 4 レスキュープロンプト (#) で、次のコマンドを入力してから **Enter** を押して、すべてのネットワークインタフェース (アクティブおよび非アクティブ) を表示します。

```
# ifconfig -a
```

Linux SUSE 名前付きおよび物理名前付きネットワークインタフェースの出力が表示されます。見つかった各インタフェースについて、次の例のような結果が出力されます。

```
eth0 Link encap:Ethernet HWaddr 00:14:4F:0C:A1:53
      inet addr:192.168.2.103 Bcast:192.168.2.255 Mask:255.255.0.0
      UP BROADCAST RUNNING MULTICAST MTU:1500 Metric:1
      RX packets:23363 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:21798 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:100
      RX bytes:13479541 (12.8 MiB) TX bytes:20262643 (19.3 MiB)
      Interrupt:9

lo    Link encap:Local Loopback
      inet addr:127.0.0.1 Mask:255.0.0.0
      inet6 addr: ::1/128 Scope:Host
      UP LOOPBACK RUNNING MTU:16436 Metric:1
      RX packets:9814 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:9814 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:0
      RX bytes:3655065 (3.4 MiB) TX bytes:3655065 (3.4 MiB)
```

- 最初の列の `eth0` エントリは、オペレーティングシステムによって割り当てられた Ethernet インタフェースの論理名です。最初の列の `lo` エントリは、ループバックインタフェースです。
- 第2列 (1行目) の `HWaddr 00.14.4F.0C:A1:53` エントリは、ネットワークポートの物理 MAC アドレスです。

複数のネットワークインタフェースが存在して、インタフェースの出力が画面に入りきらない場合には、インタフェースごとに出力を表示することができます。

```
# ifconfig eth#
```

ここでの `eth#` はインタフェース番号です。

- 5 後から参照できるように、**SUSE** 論理ネットワークインタフェース名と物理ポートの **MAC** アドレスを記録します。

Linux SUSE OS インストール時にネットワークインタフェースを設定する際に、この記録を参照する必要があります。

- 6 完了後、以下のいずれかを行って、レスキューシェルを終了します。

- ILOM Web インタフェースで、「Remote Control (遠隔コントロール)」->「Remote Power Control (遠隔電力コントロール)」->「Reset (リセット)」を選択します。
- 他のコンソールのレスキュープロンプト (#) で、`reboot` と入力して **Enter** を押しします。

- 7 SLES インストールプログラムを再起動します。

索引

D

DHCP サーバーの PXE 用設定
[DHCPサーバーのPXEようせってい], 61-62

I

ILOM JavaRConsole、リモート Linux インストール
のセットアップ[ILOM JavaRConsole、り
もーとLinuxいんすとーるのせつとあつぷ]?, 34
ILOM Web インタフェースによるセットアップ
[ILOM Webいんたふえーすによるせつとあつぷ
], 35-39
ILOM を使用したコンソールアクセス[ILOMをし
ようしたこんそーるあくせす], 35-39

J

JavaRConsole、セットアップ
[JavaRConsole、せつとあつぷ], 34, 35-39

L

Linux メディア[Linuxめでいあ]
CD-ROM のリダイレクト[CD-ROMのりだいれ
くと], 39
CD イメージのリダイレクト[CDいめーじのり
だいれくと], 39

M

MAC アドレス[MACあどれす], 78-80, 80-82

N

NFS サービスの PXE 用設定[NFSさーびすのPXEよ
うせってい], 63-64

O

Oracle Enterprise Linux[Oracle Enterprise Linux]
PXE インストール[PXEいんすとーる], 59-74
PXE インストールイメージの作成[PXEいんす
とーるいめーじのさくせい], 65-68
アップデート[あつぷでーと], 44
インストール[いんすとーる], 41-45
ドキュメント[どきゅめんと], 41
メディアキット[めでいあきつと], 42
論理および物理インタフェース名の特定制[ろん
りおよびぶつりいんたふえーすめいのとく
てい], 78-80
Oracle Enterprise Server[Oracle Enterprise Server],
PXE サーバーからのインストール
[PXEさーばーからのいんすとーる], 73-74
Oracle VM[Oracle VM], PXE インストールイメージ
の作成[PXEいんすとーるいめーじのさくせい
], 71-73

P

- portmap の PXE 用インストール[portmapのPXEよ
ういんすとーる], 62
- PXE インストール[PXEいんすとーる]
 - DHCP サーバーの設定[DHCPさーばーのせってい], 61-62
 - NFS サービスの設定[NFSさーびすのせってい], 63-64
 - OEL または RHEL でのファイアウォールの無効化[OELまたはRHELでのふあいあうおーるのむこうか], 65
 - OEL イメージの作成[OELいめーじのさくせい], 65-68
- Oracle Enterprise Linux[Oracle Enterprise
Linux], 59-74
- OVM イメージの作成[OVMいめーじのさくせい], 71-73
- portmap のインストール[portmapのいんす
とーる], 62
- PXELINUX の設定[PXELINUXのせってい], 63
- RHEL イメージの作成[RHELいめーじのさくせい], 68-70
- SLES でのファイアウォールの無効化[SLESでの
ふあいあうおーるのむこうか], 65
- SLES イメージの作成[SLESいめーじのさくせい], 70-71
- SUSE Linux Enterprise Server[SUSE Linux
Enterprise Server], 59-74
- TFTP サービスの設定[TFTPさーびすのせってい], 62-63
- ファイアウォールの無効化[ふあいあうおーる
のむこうか], 64
- PXE インストールのための OEL または RHEL での
ファイアウォールの無効化[PXEいんすとーる
のためのOELまたはRHELでのふあいあ
うおーるのむこうか], 65
- PXE インストールのための SLES でのファイア
ウォールの無効化[PXEいんすとーるのため
のSLESでのふあいあうおーるのむこうか], 65
- PXE インストールのためのファイアウォールの無
効化[PXEいんすとーるのためのふあいあ
うおーるのむこうか], 64

- PXE サーバーからの Linux のインストール
[PXEさーばーからのLinuxのいんすとーる
], 73-74
- PXE サーバーの設定[PXEさーばーのせってい
], 59-74
- PXE サーバー設定[PXEさーばーせってい], 59-74
- PXELINUX の PXE 用設定[PXELINUXのPXEよ
うせってい], 63

R

- Red Hat Enterprise Linux[Red Hat Enterprise Linux]
 - PXE インストールイメージの作成[PXEいんす
とーるいめーじのさくせい], 68-70
 - アップデート[あっぷでーと], 50
 - インストール[いんすとーる], 47-51
 - ドキュメント[どきゅめんと], 47
 - ドライバのアップデート[どらいばのあっぷ
でーと], 51
 - メディアキット[めでいあきつと], 48
 - 論理および物理インタフェース名の特定制[ろん
りおよびぶつりいんたふえーすめいのとく
てい], 78-80

S

- SIA を使用した BIOS とファームウェアのアップグ
レード[SIAをしようしたBIOSとふあーむうえあ
のあっぷぐれーど], 11-12
- SIA を使用したオペレーティングシステムのイン
ストール[SIAをしようしたおぺれーていんぐし
すてむのいんすとーる], 11-12
- SIA を使用したサービスプロセッサの回復[SIAを
しようしたさーびすぷろせっさのかいふく
], 11-12
- SIA を使用したファームウェアのアップグレード
[SIAをしようしたふあーむうえあのあっぷぐ
れーど], 11-12
- Sun Installation Assistant (SIA)[Sun Installation
Assistant SIA]
 - サポートされる作業[さぼーとされるさぎょう
], 11
 - 概要[がいよう], 11-12

Sun Installation Assistant (SIA)[Sun Installation Assistant SIA] (続き)

最新バージョンの入手[さいしんぱーじょんのにゆうしゆ], 12

SUSE Linux Enterprise Server[SUSE Linux Enterprise Server]

PXE インストール[PXEいんすとーる], 59-74

PXE インストールイメージの作成[PXEいんすとーるいめーじのさくせい], 70-71

PXE サーバーからのインストール
[PXEさーばーからのいんすとーる], 73-74

アップデート[あっぷでーと], 56

インストール[いんすとーる], 53-58

ドキュメント[どきゅめんと], 53

ドライバのアップデート[どらいばのあっぷでーと], 57-58

メディアキット[めでいあきと], 54

論理および物理インタフェース名[ろんりおよびぶつりいんたふえーすめい]

特定[とくてい], 80-82

SYSLINUX、PXE への PXELINUX の使用

[SYSLINUX、PXEへのPXELINUXのしよう], 63

T

TFTP サービスの PXE 用設定[TFTPさーびすのPXEようせつてい], 62-63

ア

アップデート[あっぷでーと]

Oracle Enterprise Linux[Oracle Enterprise Linux], 44

Red Hat Enterprise Linux[Red Hat Enterprise Linux], 50

SUSE Linux Enterprise Server[SUSE Linux Enterprise Server], 56

イ

インストール[いんすとーる]

Oracle Enterprise Linux[Oracle Enterprise Linux], 41-45

Red Hat Enterprise Linux[Red Hat Enterprise Linux], 47-51

SUSE Linux Enterprise Server[SUSE Linux Enterprise Server], 53-58

ド

ドキュメント, 5-8

ドライバ[どらいば]

Red Hat Enterprise Linux のアップデート[Red Hat Enterprise Linuxのあっぷでーと], 51

SUSE Linux Enterprise Server のアップデート
[SUSE Linux Enterprise Serverのあっぷでーと], 57-58

メ

メディアの取得[めでいあのしゅとく]

ISO イメージ[ISOいめーじ], 31-40

PXE イメージ[PXEいめーじ], 31-40

リモート DVD[りもーとDVD], 31-40

ローカル DVD[ろーかるDVD], 31-40

メディアインストール[めでいあいんすとーる],

Red Hat Enterprise Linux[Red Hat Enterprise Linux], 50

リ

リモートコンソールからの Linux のインストール[りもーとこんそーるからのLinuxのいんすとーる]?, 34

リモートコンソールの Linux メディアへのリダイレクト[りもーとこんそーるのLinuxめでいあへのりだいくと], 34

仮

仮想ディスク

作成, 14

論

論理および物理インタフェース名[ろんりおよび
ぶつりいんたふえーすめい]

Oracle Enterprise Linux での特定[Oracle
Enterprise Linux でのとくてい], 78-80

Red Hat Enterprise Linux での特定[Red Hat
Enterprise Linux でのとくてい], 78-80

SUSE Linux Enterprise Server[SUSE Linux
Enterprise Server]

特定[とくてい], 80-82